

坂城町埋蔵文化財調査報告書第17集

中之条遺跡群

北川原遺跡 II

—長野県塩科郡坂城町東信医療生活協同組合診療所建設事業に係る緊急発掘調査報告書—

2001. 3

東信医療生活協同組合

坂城町教育委員会

中之条遺跡群

北川原遺跡Ⅱ

2001. 3

東信医療生活協同組合

坂城町教育委員会

序

坂城町教育委員会教育長 大橋 幸文

北川原遺跡Ⅱは、坂城町大字中之条にあります。ここに、東信医療生活協同組合による診療所建設事業が計画され、埋蔵文化財の発掘調査が行われました。調査結果の詳細については、本文にゆずりますが、特色ある1、2の内容について以下にあげてみます。

北川原遺跡Ⅱは、中之条遺跡群の一部を形成しており、広範囲にわたる遺跡群の中に存在しています。中之条遺跡群は、御堂川によって形成された扇状地上に立地しています。中之条遺跡群の全貌については不明の部分も多いのですが、これまでの調査の積み重ねによって、かなり明らかになってきたように思います。それは、古墳時代後期から平安時代にかけての集落の様子がわかつたことです。

第一に、かなり大規模な集落が立地し、長期にわたって成立していました。それは、それぞれの遺跡をつなぐ、土器などに見られる共通の特色からうかがい知ることができます。

つぎに、北川原遺跡Ⅱは、1m前後に及ぶ大量の土砂に埋もれていることです。集中豪雨によるものと考えられますが、何回も繰り返されたはずです。今回の発掘調査で出土した五輪塔の地輪を見て、いかに大変な状況だったかがわかります。

いずれにしろ、大量の土砂は平安時代以降の自然災害によるものですが、このような大きな災害がおよそ何年頃に起こったのかは今後研究を深めたい課題です。この地を生活の舞台とした先人の災害とのたたかいは、災害によって破壊された様相を示す住居址などから読み取ることができます。

北川原遺跡Ⅱの発掘調査は、事業者である東信医療生活協同組合の全面的なご協力と、発掘調査にあたられた方々の並々ならぬご尽力によってできたものです。関係者のすべての皆さんに心からのお礼を申し上げます。

本報告書が多くの人々に活用されますことを願い序文といたします。

例言

- 1 本書は、長野県埴科郡坂城町中之条遺跡群北川原Ⅱ遺跡の発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、東信医療生活協同組合より委託を受け、坂城町教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査所在地及び面積
中之条遺跡群北川原遺跡Ⅱ 長野県埴科郡坂城町大字中之条字北川原1030-6 約360m²
- 4 調査期間
現地調査 平成12年6月26日～8月8日
整理調査 平成12年8月31日～3月30日
- 5 本書の執筆・編集は、塩入・齋藤が行なった。
- 6 本書の作成にあたり齋藤のほか助川、朝倉、天田、小宮山、坂巻、佐藤、塚田が主な作業を行なった。
- 7 本書で使用した航空写真は、(株)写真測図研究所が撮影したものである。
- 8 本書及び調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において保管されている。
- 9 本調査及び本書作成にあたって、土地所有者の中嶋邦雄氏、(社)更埴地域シルバー人材センター、長野県教育委員会からご配意を得た。記して感謝の意を表したい。

凡例

- 1 遺跡の略号は、下記のとおりである。
H→堅穴住居址 D→土坑址 F→掘立柱建物址 P→ピット Q→特殊遺構
- 2 遺構名は時代別ではなく、発掘調査時においての命名順である。
- 3 掘図の縮尺は下記を基本とし、各図ごとに縮尺を明記した。
堅穴住居址・掘立柱建物址・土坑址・特殊遺構→1/80 カマド→1/40
遺構配置図→1/300 土器→1/4 石器・石製品→1/8
- 4 掘図中におけるスクリーントーンは、下記を示す。
 - 1) 遺構
遺構構築土→斜線 烧土→網点（細） 粘土→網点（太）
 - 2) 遺物
須恵器土器断面・土師器黒色処理→網点
- 5 遺物の掘図中の表記は、第1図1は、簡易的に1-1とした。
- 6 土層の色調は、『新版 標準土色帖』の表記に基づいて記載した。

7 土器の観察表の法量は、口径・底径・器高の順に記載し、一は不明、() が残存値、< > が推定値、() ・< > が無い場合は、完存値を示し、単位はcmである。

目次

序

例言

凡例

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る動機と経緯	1
第2節 調査の構成	2
第3節 調査日誌	3
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査の概要	8
第1節 調査の方法	8
第2節 基本層序	9
第3節 検出された遺構・遺物	9
第Ⅳ章 調査の結果	11
第1節 堅穴住居址	11
第2節 掘立柱建物址	28
第3節 土坑址	31
第4節 焼土址	32
第5節 特殊遺構	33
第6節 ピット及び遺構外出出土遺物	34
第Ⅴ章 総括	35
出土土器観察表	
写真図版	
あとがき	
報告書抄録	

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機と経緯

北川原遺跡Ⅱは、坂城町大字中之条に所在し、標高420～460m前後を測る御堂川によって形成された扇状地の扇尖部に立地している。周辺では、平成11年度に実施された都市計画街路事業に伴う上町遺跡Ⅳの発掘調査や、同じく平成11年度に店舗建設に伴う開斎遺跡Ⅲの発掘調査によつて古代に位置付けられる集落址の存在が判明している。

今回、東信医療生活協同組合による、診療所建設事業が計画され、遺跡の破壊が余儀なくされることとなり、原因者の東信医療生活協同組合、土地所有者の中島邦雄氏、みんなの建設設計社、坂城町教育委員会生涯学習課などの4者による保護協議の結果、開発対象地の遺跡の状況を確認するため、平成12年4月6日から8日にかけて試掘調査を実施した。この結果をもとに再度の保護協議を行った結果、浄化槽部分・スロープ部分、及び診療所部分については、増築計画があるということから、増築予定部分を含めた診療所部分について発掘調査を行う運びとなった。



第1図 北川原遺跡Ⅱ位置図 (1:25000)

また、今回調査が行われた遺跡は、平成元年度に作成された『坂城町遺跡分布図』によると、周辺地域を含めて中之条遺跡群と総称されていたが、今回の調査にあたり、この地域の字名をとって遺跡名を北川原遺跡と命名し、現在整理中である平成7年度に実施された中之条遺跡群Ⅱの発掘調査を北川原遺跡Ⅰとし、今回の発掘調査を北川原遺跡Ⅱに改めた。

第2節 調査の構成

発掘調査体制

調査指導者 塩入 秀敏（上田女子短期大学教授、日本考古学协会会员）

調査担当者 斎藤 達也（坂城町教育委員会学芸員）

調査補助員 天田 澄子、小宮山 秀子、坂巻 ケン子、塚田 さゆり

調査協力者 伊藤 篤、池田 てる子、滝沢 製婆男、竹鼻 茂、塚田 智子、日向 正義、丸橋 智子、柳沢 真夫、山辺 久雄（以上、更埴地域シルバー人材センター）

整理調査体制

調査指導者 塩入 秀敏（前出）

調査担当者 斎藤 達也（前出）

調査補助員 朝倉 妙子、天田 澄子、小宮山 秀子、坂巻 ケン子、佐藤 昭子、塚田 さゆり、萩野 れい子

調査協力者 池田 てる子、小島 光子、塚田 智子、中島 千津子、三井 重子
(以上、更埴地域シルバー人材センター)

(事務局)

教育長 大橋 幸文

教育次長 宮原 健一（生涯学習課長兼務）

文化財係長 池田 弥惣

文化財係 助川 朋広、斎藤達也

朝倉 妙子、大田 澄子、小宮山 秀子、坂巻 ケン子、佐藤 昭子、
塚田 さゆり、萩野 れい子（以上、町臨時職員）

第3節 調査日誌

発掘調査

平成12年度

6月26日	バックホーによる表土剥ぎを行う。	7月21日	F 2号掘立柱建物址完掘。
	調査開始式を行う。	7月28日	H 4号住居址がカマドを移築して いたことが判明。引き続きカマド
6月27日	遺構検出作業を開始。		の精査を行う。
6月30日	調査区基準点測量を実施。	8月4日	ラジコンヘリによる空中撮影を実 施。
7月3日	検出された住居址の調査を開始。		調査区内の単点測量を実施。
7月5日	激しく重複している住居址の中で 最も新しい住居址をH 3号住居址 と命名して調査開始。		機材の搬出を行う。
7月10日	H 9号住居址調査完了。河川によ る破壊が著しく、範囲等は不明で あった。	8月8日	終了式を行う。 発掘調査終了。

整理調査

平成12年度

8月21日	土器洗い開始。
8月31日～3月30日	図面修正等開始。遺物接合・復元・実測・トレース・遺物撮影等を行い、 原稿の執筆をして報告書を刊行する。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 自然的環境

坂城町は、北信地方と東信地方の接触点にあたり、善光寺平を構成する更埴地方の最南端に位置する。町は、貫流する千曲川の氾濫によって形成された氾濫原と、千曲川に流れ込む小河川がつくりだす扇状地によって形成された坂城広谷と呼ばれる幅広い貫通谷に立地する。町の北から東にかけては五里ヶ峰・大峰山・虚空藏山をはじめとする標高1100～1300m前後の山々が連なり、更埴市・真田町・上田市との市町村界を形成し、西は大林山、三ッ頭山などの標高1000m前後の山々が連続し、上山田町・坂井村・上田市との境をなしている。南は千曲川右岸の岩鼻と対岸の

半過の岩鼻が狭隘な地形を形成し、上田盆地と隔てられている。このように、自然の城郭のような地形をしていることから、この地域は千曲川流域の要衝として古くから注目されてきた。

この地域の気候は、南北に開けた広谷をなしていることから、季節風の影響が強く、夏季は南風、冬季は北風が卓越する。また、盆地状になっていることから寒暖の差が激しい。年間を通じて降水量は少なく、日本で最も雨量の少ない地域の一つとなっている。この気候を生かして、町では工業が主要な産業となっており、バラ・ぶどうなどの花や果物の栽培も盛んに行われている。

北川原遺跡は千曲川右岸の中之条地区に位置し、御童川がつくる扇状地の扇尖部に位置し、標高は430m前後である。周辺には、やはり工場がいくつかあり、工業が盛んである。

第2節 歴史的環境

ここで、坂城町の旧石器時代から中・近世までの各時期における代表的な遺跡を挙げつつ、坂城町の歴史的環境についてごく簡単に触れておきたい。また、中之条遺跡群や北川原遺跡周辺の遺跡の概要についても最後に触ることとする（註1）。

坂城町最古の人類の痕跡は、南条地区に位置する保地遺跡（第2図3-1）で確認されている。保地遺跡からは、上ヶ屋型彫刻器・尖頭器・石核などの旧石器時代後期に属する石器が採集されているが、遺構は確認されていない。現在までのところ、保地遺跡以外に旧石器時代の遺物は、町内では確認されていない。

縄文時代では、早期押型文系の土器が和平A遺跡や平沢遺跡で採集されている。また、平成12年度に発掘調査が行われた込山C遺跡からも押型文系の土器片が出土しているが、現在整理中である。この込山C遺跡では縄文時代前期、及び中期の土器も確認されている。後期・晚期では、学史的に有名な保地遺跡が挙げられる。保地遺跡は、昭和40年度と平成11年度に調査が行われている。前者については後期前半から晚期後半までの土器・石器群と、後期後半に属するとされる特殊儀礼的遺構の出土が、『考古学雑誌』に報告されている（関1966）。後者については現在整理中である。また、込山D遺跡では、遮光器土偶の頭部が採集されている。

弥生時代では中期以前の調査例がなく状況は不明であるが、後期後半では塚田遺跡（第2図1-7）が代表的である。工業団地造成事業に伴い、平成5年度に発掘調査が行われ、竪穴住居址36棟をはじめとする遺構と、壺や甕などの土器、石包丁などの石器、土製スプーンなどの土製品、鉄斧などが出土した。

古墳時代では、前期古墳は確認されていないが、中期古墳には仮称東平1号墳・2号墳が挙げられる（註2）。上信越自動車道の建設に伴い、（財）長野県埋蔵文化財センターによって平成5年度に発掘調査が行われ、出土した埴輪や土器などから東平2号墳の築造時期は5世紀第2四半



- 1 南条遺跡群(弥～半) 1-5 出町遺跡(弥～半) 1-6 遊日遺跡(弥～平) 1-7 桜田遺跡(弥～平)
 2 金井西遺跡群(繩～平) 2-1 金井遺跡(繩～平) 2-2 社宮神代遺跡(繩～平) 2-3 並木下遺跡(繩～平)
 3 金井東遺跡群(繩～平) 3-1 保地遺跡(繩～平) 3-2 山金井遺跡(繩～半) 3-3 大木久保遺跡(繩～平) 3-4 酒玉遺跡(繩～平)
 4 粟ヶ谷古墳(古墳) 5 杜宮神代塚(中世) 6 町横尾遺跡(繩～平) 7 北畠古墳(古墳後期) 8 中之条遺跡群(繩～平)
 8-1 寺浦遺跡(繩～平) 8-2 上町遺跡(弥～平) 8-3 東町遺跡(弥～半) 8-4 北瀬遺跡(繩～平) 8-5 宮上遺跡(繩～平)
 8-6 北川原遺跡(繩～中世) 9 南条塚古墳(古墳後期) 10 谷川古墳群(古墳後期) 10-1 入鹿尾支群向田古墳(古墳後期)
 10-2 入横尾支群鸡塚古墳(古墳後期) 11 入横尾遺跡(平) 13 南原塚古墳群(中世～近世) 14 朝奈山古墳群山山支群(古墳後期)
 15 山崎遺跡(繩) 16 御堂川古墳群山崎支群(古墳後期) 17 御堂川古墳群黄石支群(古墳後期) 17-1 前山1号墳(古墳後期)
 17-2 前山2号墳(古墳後期) 17-3 前山3号墳(古墳後期) 17-4 前山4号墳(古墳後期) 17-5 前山5号墳(古墳後期)
 17-6 前山6号墳(古墳後期) 18 御堂川古墳群東平支群二塚古墳(古墳後期) 19 御堂川古墳群山田支群(古墳後期) 20 畠筋堂遺跡(繩～弥)
 21 關前遺跡(弥～平) 22 入塚古墳(古墳後期) 23 西ヶ原遺跡群(繩～平) 24 成久保遺跡(古～平) 25 入田遺跡(奈～平)
 26 堀内古墳(古墳) 53 同軸製鐵遺跡(中世) 65 中之条石切場跡(近世) 66 砂沢古墳(古墳後期) 67 中之条代官所跡(中世)
 69 製音坂城跡(中世) 70 南經の川遺跡(奈～中)

第2図 周辺遺跡分布図

期前半に位置付けられ、1号墳はそれよりやや遅れる5世紀後半と推定された（若林1999）。後期古墳では、町内でもいくつかの古墳群の存在が知られているが、中でも代表的なものは、村上地区の福沢古墳群小野沢支群に属する御厨社古墳である。内部施設に千曲川水系最大の石室をもち、全長11.2mを測り、勾玉や切子玉、耳環などが出土している。集落遺跡・祭祀遺跡では、環状に配列された土器群が検出され、全国的にも注目された青木下遺跡が代表的である。

奈良時代・平安時代では、今回調査が行われた北川原遺跡周辺に代表的な集落遺跡が存在する。すでに報告書が刊行されている守浦遺跡Ⅰ・Ⅱ（第2図8-1）や疊鏡堂遺跡（第2図20）、上町遺跡（第2図8-2）、東町遺跡（第2図8-3）、開歓遺跡（第2図21）などが代表的である。このほかにも宮上遺跡（第2図8-5）や上町遺跡Ⅳが挙げられるが、これらは現在整理中である。また、これら遺跡の概要については後で触れる。平安時代では、生産遺跡として土井ノ入瓦窯跡があり、込山魔寺の瓦だけでなく、上田市信濃国分寺・尼寺や更埴市正法魔寺の補修用の差し瓦として生産・使用されていたことが分かっている。

中世に入ると、平安時代後期、寛治8年（嘉保元）（1094）に村上地区に配流されてきた源義清が、後に村上氏として勢力を持つようになり、戦国時代には村上義清が活躍するようになる。村上氏の居館は、義清の頃には現在の満泉寺一帯に所在していたとされている。その背後にそびえる葛尾山の山頂には、義清が使用した葛尾城跡があるが現存していない。時代が前後するが、中世の遺跡では、坂城地区に觀音平経塚や蓬平経塚といった経塚と開歓製鉄遺跡（第2図53）がある。觀音平経塚は昭和54年と平成4年に調査が行われており、平成4年の調査では、経塚の年代を14世紀後半と想定している。また、このときの調査では五輪塔群についても調査され、その造営時期は14世紀後半から16世紀前半頃に位置付けている（若林1999）。開歓製鉄遺跡は、昭和52・53年に坂城町教育委員会によって学術調査が行われ、16世紀頃の製鉄炉址2基が確認されている。この調査は県内初の製鉄遺跡調査として有名である。

近世、江戸時代に入ると、現在の坂城地区と中之条地区にあたる坂木村、中之条村には天和2年（1682）に幕府天領が置かれ、以後明治維新まで続いた。この地域が重要視されていたことがうかがえる。陣屋は最初、坂木に置かれたが、明和4年（1767）に焼失し、その後、安永8年（1779）中之条に陣屋が置かれている。

ここまで、ごく簡単に坂城町の歴史的環境について触れた。次に、北川原遺跡周辺の遺跡の概要について触れる。

北川原遺跡は、中之条遺跡群の一部である。中之条遺跡群は寺浦・上町・東町・北浦・宮上遺跡で構成され、古墳時代後半から平安時代までの集落遺構と遺物が多く検出されている。前述のように北川原遺跡は、今回発掘調査が実施されるにあたって字名をとって新たに命名されたものである。北川原遺跡は同遺跡群のなかでも北端に位置し、北及び東側は開歓遺跡と接し、西は同

群内の宮上遺跡と接する。南側、及び西側には寺浦遺跡、上町遺跡、東町遺跡がある。

寺浦遺跡は、県単街路・県単高速道路関連道路改良事業（寺浦遺跡Ⅰ）及び消防坂城分署建設（寺浦遺跡Ⅱ）に伴い調査が行われた。今回調査地点より約300m南に位置する。寺浦遺跡Ⅰでは、古墳時代後期から奈良・平安時代の堅穴住居址21棟と、古墳後期から中世とされる掘立柱建物址が16棟検出されている。遺物では縁軸陶器の壺の破片をはじめとして土師器・須恵器が出土している。この調査地点に隣接して寺浦遺跡Ⅱの調査が実施されたのであるが、ここでは、古墳時代後期から平安時代までの堅穴住居址6棟と掘立柱建物址16棟が検出されている。これらの遺跡で特徴的なのは大型の掘立柱建物址の存在である。3間×5間や3間×6間といったプランをもつ掘立柱建物址がいずれの調査においても検出されている。また、遺物についても、縁軸陶器のほかに、隣接する上町遺跡からは灰釉陶器の薬壺の蓋が出土し、さらに都市計画街路事業に伴って実施された上町遺跡Ⅳでは、奈良二彩（三彩？）の薬壺の蓋が出土しているなど、寺浦遺跡周辺は一般的な集落では見られないような遺構や遺物が出土している。こういった特徴から、この周辺に坂城郷の郷家、あるいは地方豪族の居館の存在していた可能性が指摘されている。（助川1996）

また、今回調査地点より約300m西に位置する宮上遺跡では、坂城中学校建設事業に伴い平成3・4・7・9年度に調査が行われ、堅穴住居址36棟、掘立柱建物址7棟などが検出されている。北川原遺跡の西に隣接する地域も都市計画街路事業に伴い、中之条遺跡群として発掘調査が行われており、堅穴住居址や掘立柱建物址が検出されている。上町遺跡Ⅳ、宮上遺跡、北川原遺跡Ⅰについては現在整理中である。（註3）

中之条遺跡群の概要については以上であるが、今までの発掘調査によって、この地域の古墳時代後期から平安時代にかけての集落の状況が徐々に判明しつつあり、今後の発掘調査や未報告の調査の整理・分析が進むことで、さらに多くの知見が得られると思われる。

註1 引用・参考文献は総括の部分にまとめて掲載する。

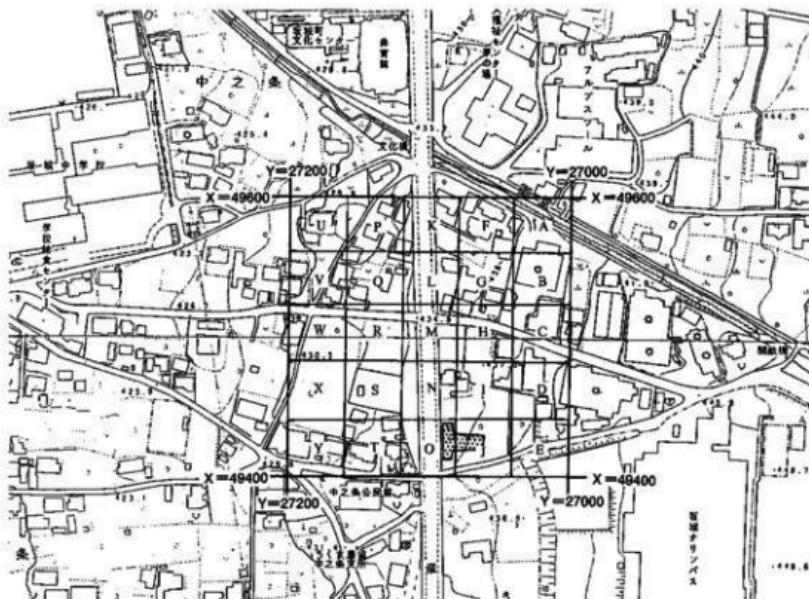
2 周知の御堂川古墳群東平支群1号墳・2号墳とは異なる可能性があるため、仮称されているが、今後、正式な古墳名称の確定が必要である。

3 宮上遺跡については平成4年度に概報が刊行されている。坂城町教育委員会 1993「宮上遺跡Ⅱ」。

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査の方法

本遺跡の調査には、調査区の造構・遺物の正確な位置を記録でき、なお周辺に存在する造構・遺物の調査にも整合できるように、面系国家座標の座標軸を基にグリッドを組んだ。グリッドは、200m×200mの大グリッドを設け、区画を行った。その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定（第3図）し、東北端より、A・B・C・・・Y区とアルファベットの大文字で命名した。本調査区では、J・O区が相当する。さらにその中グリッドを4m×4mのグリッドで100区画に分割し、南北列を北から算用数字で1・2・3・・・10、東西列を東から五十音順で、あ・い・う・・・こ、とし、各グリッドの北東交点を小グリッドとした。造構外出土遺物の取り扱い及び造構の検出位置は、この小グリッドの単位で行った。また、造構の実測は、1/20を基本として簡易造り方測量で行った。



第3図 北川原遺跡Ⅱ発掘調査区設定図 (1:4000)

第2節 基本層序

本遺跡の調査区内では、I層からIV層に分けられる。

I層はにぶい黄褐色を呈する耕作土である。

II層は黄褐色を呈する砂礫層で、自然流路によって堆積したものと考えられる。

III層は黒褐色を呈する粘質土層で古墳時代後期から奈良・平安時代の遺物を含む遺物包含層である。

IV層はにぶい黄褐色を呈する砂礫層で御堂川の形成による扇状地に普遍的に堆積する土層で、遺構の検出面とした。本来遺構の構築は、IV層より上位にて行われていたと考えられるが、遺構覆土との判断が極めて難しいため、IV層にて遺構検出を行った。

また、本遺跡の調査区内は、II層のはかに、河川の流路にともなう砂礫層が存在し、その層はIII層及び遺構の覆土層を破壊しており、そのために遺構が破壊されている部分も多く確認された。流路は3本検出され、一部重複している部分もあったが、新旧関係は不明である。流路はいずれも西に向かって流れ、最終的には千曲川に合流していたものと思われる。現在、調査区の周辺では、北側を御堂川が流れている。今回の調査で検出された河川跡が、かつての御堂川の流路と思われ、この地域が、遺構構築後何回かにわたって河川の流路になっていたことを物語っている。

第3節 検出された遺構・遺物

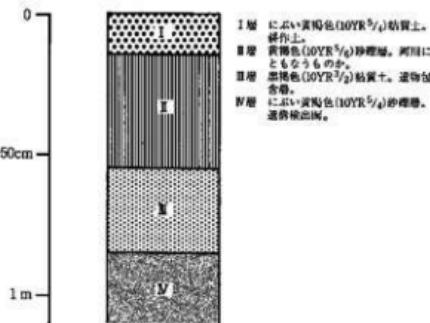
北川原遺跡IIの発掘調査によって検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

遺構 古墳時代後期～奈良・平安時代 積穴住居址 11棟

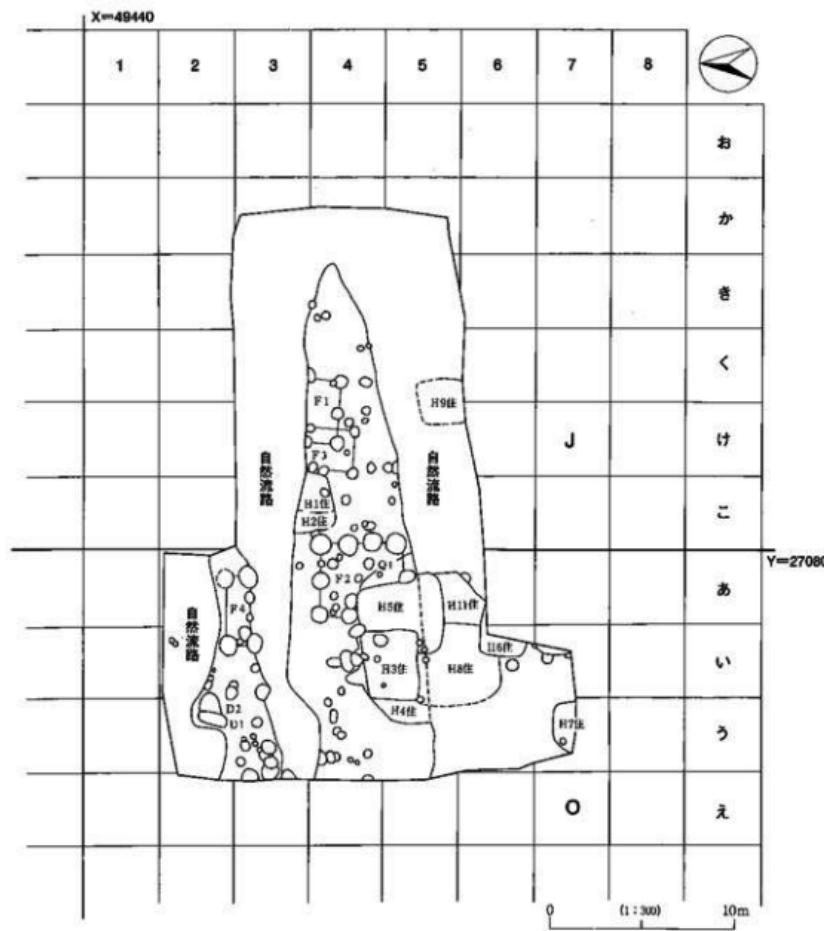
時期不明	掘立柱建物址	4棟
	土坑址	3基
	焼土址	1基
	特殊遺構	1基
	ピット	90基

遺物 古墳時代後期～奈良・平安時代 土師器・須恵器・石臼

中世 五輪塔



第4図 基本層序模式図



第5図 北川原遺跡Ⅱ造構配図 (1:300)

第Ⅳ章 調査の結果

第1節 竪穴住居址

1) H 1号住居址

遺構（第6図）

検出位置 Jけ3・4、Jこ3・4グリッド。**重複関係** 自然流路、P 1に切られる。H 2号住居址、F 3号掘立柱建物址、P 6を切る。平面形態 自然流路に北側を破壊されているため、長軸・短軸が不明である。東西に2.0mを測り、隅丸方形を呈すると思われる。東西の軸方位はN-76°-Eを指す。壁残高は17~23cmを測る。**覆土** 角亜疊を多量に含む黒褐色の粘質土に被覆されていた。床面の状況 おおむね平坦であるが、堅固ではなかった。ピット 床面上で1基確認できた。楕円形を呈し、深さは6~11cmを測る。本址の主柱穴は不明である。カマド 東壁で検出。遺存状況は悪い。自然流路に左袖と燃焼部が破壊されており、右側の袖が残存するのみである。袖は、長細い礎を立て、その周りを粘土で覆って構築されていた。袖の長軸方位はN-85°-Wを指す。**遺物の出土状況** 覆土中やカマド周辺から遺物が出土している。土師器の壊・小型甕・壺や須恵器の壊が出土した。

遺物（第7図）

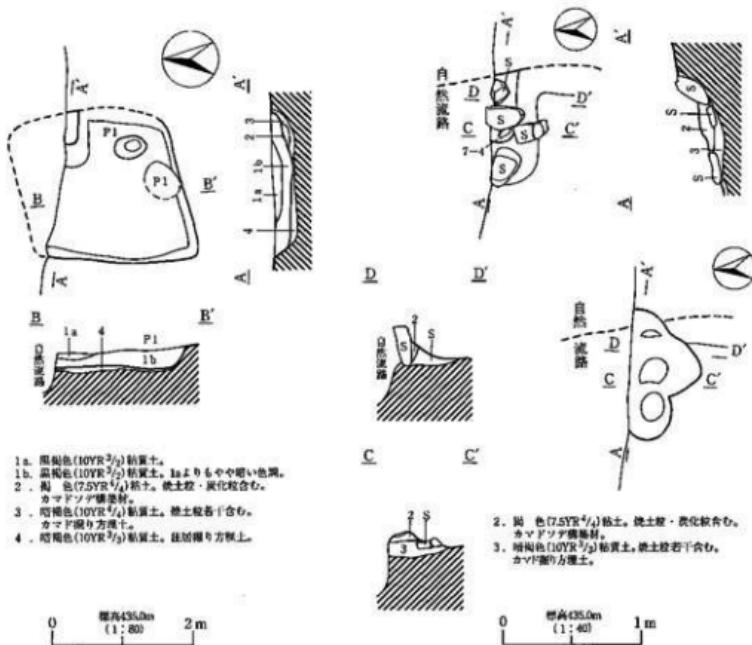
土師器・須恵器がカマド周辺を中心に出土し、そのうち國化できたものは7点である。7-1~4は須恵器の壊で、7-1~3は、回転糸切り未調整のものである。7-4も破片は小さいが、同様のものと思われる。7-5は、土師器の壊で、外面に接合痕を残す。また、内面は黒色処理が施されている。他の土器より時期がやや古いものと思われ、覆土に流れ込んだものと考えられる。7-6は、小型甕で、胴部の外面はヘラケズリが施されている。7-7は、いわゆる砲弾甕と呼称される甕の底部と思われる。ロクロ整形のあと、外面にヘラケズリを施し、底部は静止糸切り未調整である。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から平安時代前半（9世紀前半）に位置付けられる。

2) H 2号住居址

遺構（第8図）

検出位置 Jこ3・4グリッド。**重複関係** 自然流路、H 1号住居址に切られる。P 21を切る。



第6図 H 1号住居址・カマド実測図



第7図 H 1号住居出土器実測図

平面形態 北側・東側が破壊されているため、長軸・短軸は不明であるが、隅九方形を呈するものと考えられる。南北の軸方位は、N-8°-Wを指す。壁残高は、8~21cmを測る。**覆土** 黒褐色粘質土に被覆されていた。床面の状況 おおむね平坦であるが、堅固な状態ではなかった。**ピット** 検出されなかった。カマド 検出されなかった。自然流路側の北壁か、H 1号住居址側の東壁に存在していたと考えられる。**遺物の出土状況** 覆土中から出土しているが、出土量は少ない。

遺物（第9図）

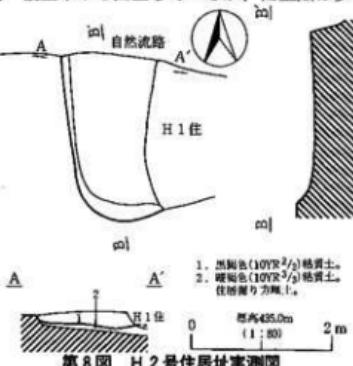
遺物量は少なく、図化できたものは土師器の壺1点のみである。ロクロ調整され、底部は回転糸切り未調整である。内面には黒色処理が施されている。

時期 本址は、覆土の違いから積極的に解釈してH 1号住居址とは別造構として扱った。しかし、本址が、H 1号住居址の一部である可能性は否定できない。所属時期は、出土遺物が少なく、判断材料に乏しいが、H 1号住居址に切られているとすると、それ（平安時代前半）以前に位置付けられようか。

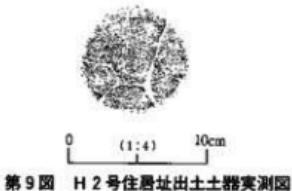
3) H 3号住居址

造構（第10図）

検出位置 Oい4・5、Oう4・5グリッド。重複関係 P 2~5・7・19・38に切られる。H 4・5・8号住居址を切る。**平面形態** 東西を長軸とする隅九長方形を呈す。長軸3.6m、短軸2.8mを測る。主軸方位はN-3°-Wを指す。壁残高は4~20cmを測る。**床面の状況** おおむね平坦で、比較的堅固な状態であった。**覆土** 黒褐色粘質土のみに被覆されていた。**ピット** 床面上から4基確認され、P 1~P 3が主柱穴と思われる。これらのピットの配置から、P 1の東側に柱穴となるべきピットの存在が推定されたが、検出されなかった。P 1は梢円形を呈し、深さ6~7cmを測る。P 2は梢円形を呈し、深さ15~17cmを測る。P 3は梢円形を呈し、深さ9~14cmを測る。P 4は円形を呈し、深さ7~10cmを測る。カマド 検出されなかった。**遺物の出土状況** 覆土中より土師器・須恵器が出土した。



第8図 H 2号住居址実測図



第9図 H 2号住居址出土土器実測図

遺物（第11図）

本址の出土遺物で、固化できたものは1点のみである。須恵器の凸帯付四耳壺と思われるが、口縁部が、短頸壺のように短く立ちあがっており、あまり類例のない器形である。凸帯貼り付け後、凸帯の下方から耳を貼り付け、凸帯の上から穿孔している。また、凸帯と頸部の間に2条の沈線が施されている。

時期 本址の所属時期は、出土遺物が少ないが、凸帯付四耳壺が出土していることから、平安時代（9世紀）に位置付けられようか。

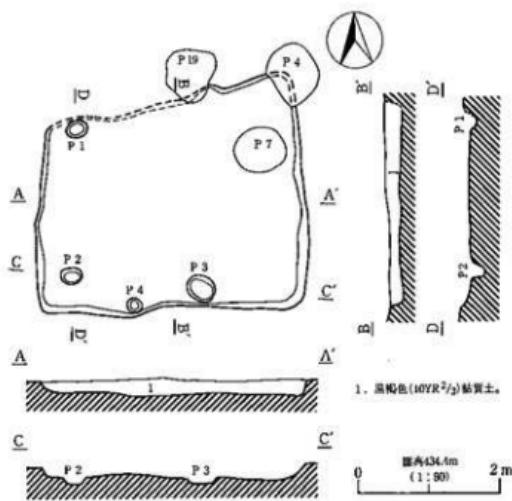
4) H 4号住居址

遺構（第12・13・15図）

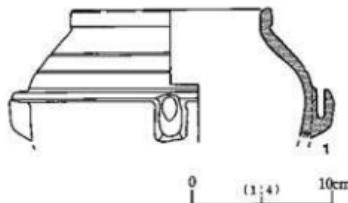
検出位置 Oい4・5、
Oう4・5、グリッド。重複

関係 自然流路、H 3・5・

8号住居址、1号焼土址、P 4・19に切られる。平面形態 自然流路とH 8号住居址、H 5号住居址に南側と東側を破壊されているが、カマドの位置等から推定して、1辺5m前後の隅丸方形を呈すると考えられる。東西の軸方位はN-74°-Eを指す。床面の状態 おむね平坦で比較的堅固であった。覆土 角亞磚を含む黒褐色土のみに被覆されていた。ピット 検出されなかった。カマド 北壁より2基検出された。便宜的に東側のカマドを1号カマド、西側を2号カマドと称することにする。2号カマドは煙道部分のみ確認された。主軸方位はN-12°-Wを指す。燃焼部や袖は検出されず、磚によって塞がれている状況であり、焼土や炭化物も検出されず、遺物の集中も見られなかった。1号カマドは煙道部を1号焼土址とP 19に一部破壊されているが、

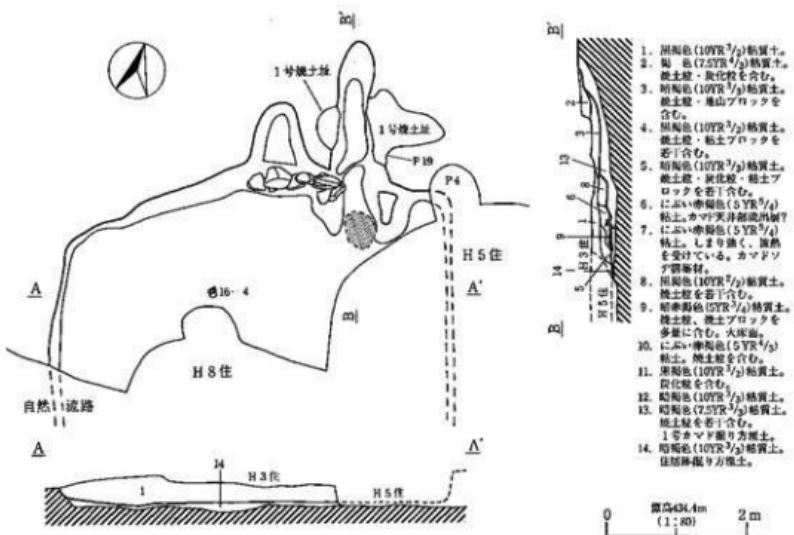


第10図 H 3号住居址実測図

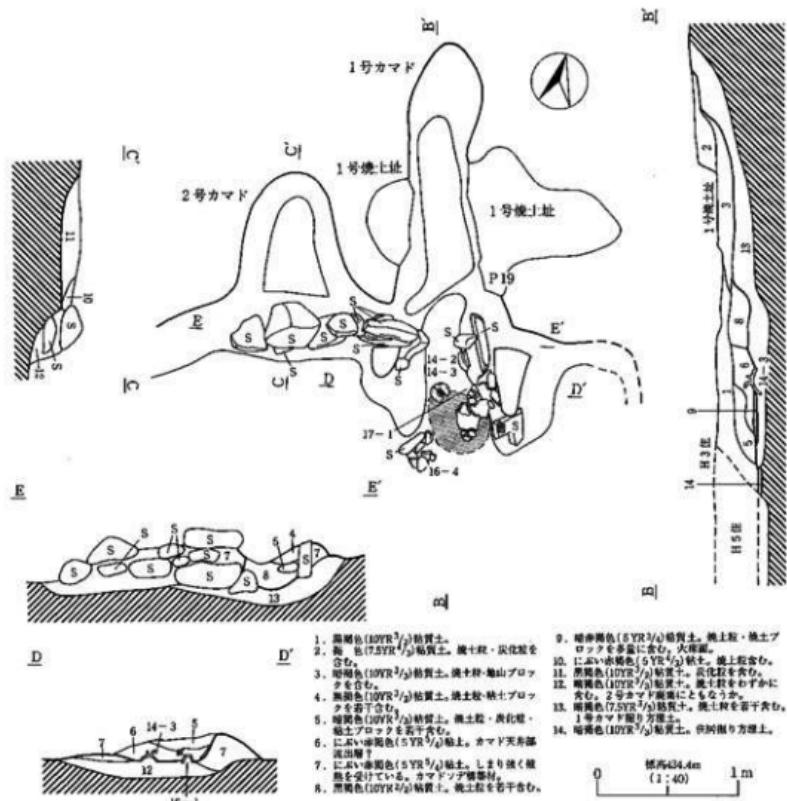


第11図 H 3号住居址出土遺物実測図

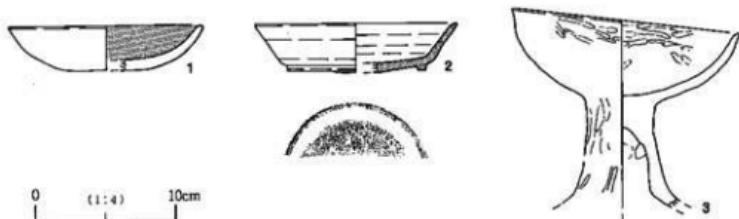
遺存状況は比較的良好といえる。主軸方位はN-17°-Wを指す。燃焼部には高壙と小型鉢が、支脚として転用され、東西に並んで逆位に据えられた状態で出土した。おそらく、1号カマドは2連式のカマドであったと考えられる。両袖部は、共に礫を粘土で被覆して構築されているが、左袖についてはその西側にも礫が並び、1号カマドの煙道付近まで続いている状況であった。そのことから、まず、2号カマドが設置され、その後何らかの理由で使用をやめ、袖や燃焼部を壊してその東側に1号カマドを移築し、2号カマド部分にも礫を並べたものと考えられる。また、住居址の範囲は2号カマドを北壁中央に設置したものとして推定している。遺物の出土状態 覆土中、及び1号カマド周辺より多量に出土している。土師器の壺、高壙、小型鉢、甕と須恵器の高台付壺、及び円筒形土製品等が出土している。



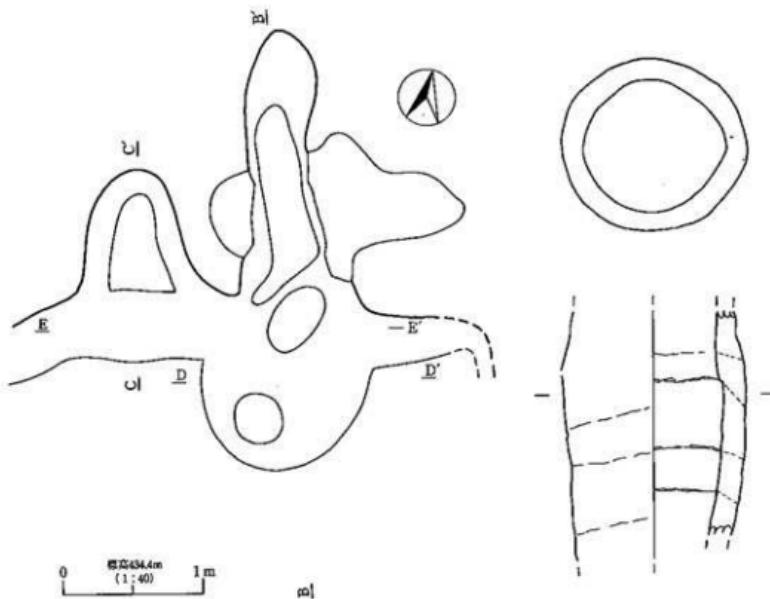
第12図 H4号住居址実測図



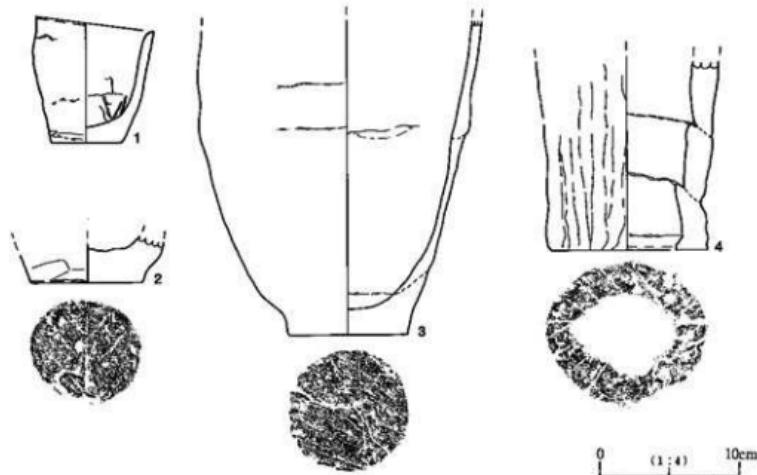
第13図 H 4号住居址1・2号カマド実測図



第14図 H 4号住居址出土器物実測図(1)



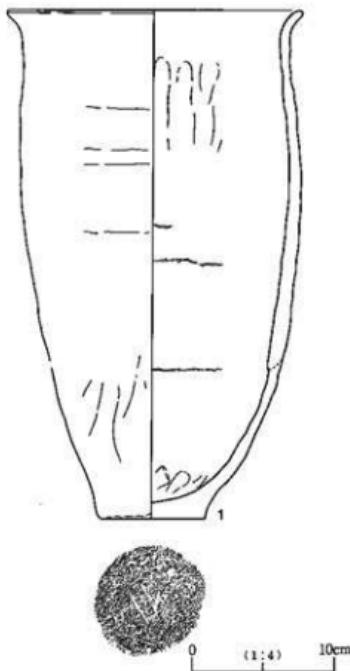
第15図 H4号住居址1号・2号カマド掘り方実測図



第16図 H4号住居址出土土器実測図(2)

遺物（第14・16・17図）

覆土中、及び1号カマド周辺を中心に遺物が出土しているが、固化できたものは1号カマド周辺出土の8個体である。14-1は土師器の坏で、内面に黒色処理が施されている。14-2は須恵器の高台付坏で底部が高台よりも若干飛び出す形態のものである。14-3は土師器の高坏で、脚端部を欠損している。1号カマド支脚として、脚部を上にして転用された状態で出土した。坏部外面及び内面にヘラミガキが施されている。16-1は、土師器の小型鉢と呼べるものであろうか。14-3と並んで1号カマドの支脚として底部を上にした状態で出土した。外面・内面ともヘラ状工具によるナデ調整が施されており、内面には工具痕が残る。16-2は土師器の壺の底部で、外面に木葉痕が残っている。16-3は土師器の長胴壺の胴部下半部から底部である。1号カマド火床面付近から出土した。外面・内面にナデ調整が施されている。胴部に輪積み痕、底部外面には木葉痕が残る。17-1は土師器の長胴壺である。16-3同様、外面・内面にナデ調整が施され、胴部に輪積み痕、底部外面に木葉痕が残るが、木葉痕は中心部を残してナデ消されている。16-4は円筒形土製品である。底部と胴部に分かれているが、胎土の色調や径から同一個体であると考えられる。底部穿孔で、時計回りに巻き上げ整形され、外面は縦位のナデ調整が施されているが、胎土などを含め雜に仕上げられており、巻き上げ痕が残る。底部外面には木葉痕を残す。



第17図 H 4号住居址出土土器実測図(3)

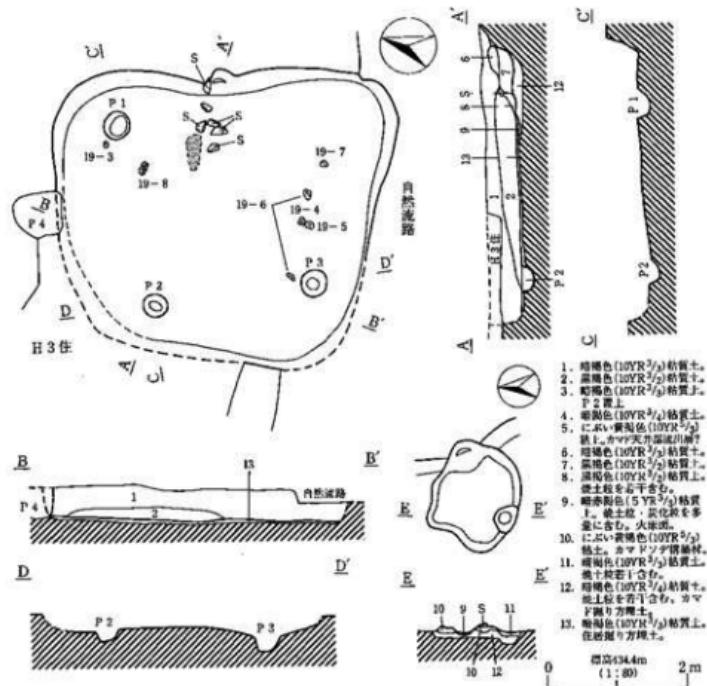
時期 本址の所属時期は出土遺物から古墳時代後期後半から奈良時代前半（7世紀後半～末）に位置付けられる。

5) H 5号住居址

遺構（第18図）

検出位置 Oあ4・5、Oい4・5グリッド。重複関係 自然流路、H 3号住居址に切られる。H 4・8・11号住居址、F 2号掘立柱建物址P 4、P 98を切る。平面形態 南壁・東壁・西壁の

上場の一部を掘りすぎてしまったが、南北4.4m、東西3.6mのやや歪んだ隅丸方形を呈し、主軸の方針はN—15°—Wを指す。壁残高は29~73cmを測る。西に下る地形のため、東壁側が深くなっている。覆土 2層に分けられる。1層は暗褐色の粘質土、2層は角亜礫を含む黒褐色粘質土である。床面の状態 おおむね平坦で堅固であった。ピット 主柱穴と考えられるピットが3基、床面上から検出されている。H 3号住居址同様、P 1の南側に想定される対になるべき柱穴のピットは検出されなかった。P 1は円形を呈し、深さは15~17cmを測る。P 2は円形を呈し、深さは14~17cmを測る。P 3は円形を呈し、深さは34~38cmを測る。カマド 東壁中央部に位置するが、遺存状態は悪い。火床面以外は、袖や天井部の構築材と思われる礫と少量の粘土が残っているのみであった。遺物の出土状態 カマドの周辺と南壁付近を中心に土師器・須恵器が出土している。

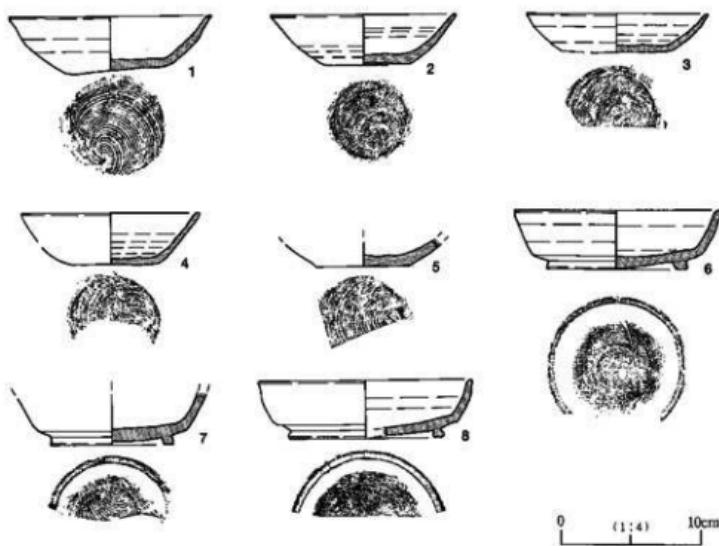


第18図 H 5号住居址・カマド掘り方実測図

遺物（第19図）

土師器・須恵器が出土しているが、図示できたのは須恵器の坏、及び高台付坏の8点である。19-1～5は須恵器の坏である。いずれも、底部外面は回転糸切り未調整である。19-1は焼成がやや悪く、灰オリーブ色を呈す。また、19-1は胎土がやや粗い。19-6～8は須恵器の高台付坏である。19-6・7は、外面底部中央の糸切り痕を残して回転ヘラケズリが施され、高台が貼り付けられている。糸切り痕の残り方は19-7の方が大きい。また、國化はできないが、いわゆる武藏型壺の「コ」の字状の口縁部片も出土している。

時期 本址の所属時期は、出土遺物から奈良時代末から平安時代前半（8世紀末～9世紀前半）に位置付けられる。



第19図 H 5号住居址出土土器実測図

6) H 6号住居址

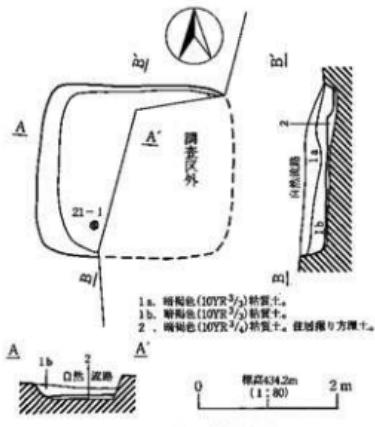
遺構 (第20図)

検出位置 ○あ6、○ひ6グリッド。**重複関係** 自然流路に切られる。H 8号住居址を切る。
平面形態 東側が調査区外に延びるため、長軸・短軸が不明である。南北に2.3mを測り、隅丸方形を呈すと考えられる。南北の軸方位はN—4°—Eを指す。壁残高は9~31cmを測るが、上面は自然流路に破壊されているため、実際の壁高はより高いと考えられる。覆土 2層に分けられる。1a層は暗褐色の粘質土であるが、自然流路の影響を受けていためか川原石のような礫を多量に含む。1b層は暗褐色の粘質土である。**床面の状態** おおむね平坦だが堅固な状態ではなかった。**ピット** 検出されなかった。**カマド** 検出されなかった。東側の調査区外に位置しているとも考えられる。**遺物の出土状況** 覆土中から土師器・須恵器が出土しているが量は少ない。

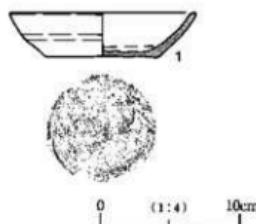
遺物 (第21図)

覆土中より、土師器・須恵器が少量出土しているが固化できたものは1点のみである。21-1は須恵器の壊で完形である。底部外面は回転糸切り未調整である。外面・内面に火だしきを残す。

時期 出土遺物が少なく、判断材料に乏しいが、本址は奈良時代後半から平安時代前半（8世紀末~9世紀前半）に位置付けられようか。



第20図 H 6号住居址実測図



第21図 H 6号住居址出土土器実測図

7) H 7号住居址

遺構 (第22図)

検出位置 ○う7グリッド。**重複関係** 自然流路、P 6に切られる。平面形態 南側が調査区外に延びるため長軸・短軸が不明である。北壁の状況から歪んだ隅

丸方形を呈する考えられる。東壁を基準にした軸方位は、N-10°-W?を指す。覆土 2層に分かれ。1層は黒褐色粘質土である。2層は暗褐色粘質土である。床面の状態 おおむね平坦だが、堅固ではなかった。ピット 検出されなかつた。カマド 検出されなかつた。遺物の出土状況 覆土中より土師器片が数点出土したのみで、図化できるものはなかつた。

時期 出土遺物がほとんどないため所属時期は不明である。また、ピットやカマドといった施設も検出されなかつたので住居址ではないことも考えられる。しかし、歪んではいるものの、平面形態が住居址に近く、床面と呼べるような平坦面が存在し、掘り方を持っていたことから、今回は住居址とした。

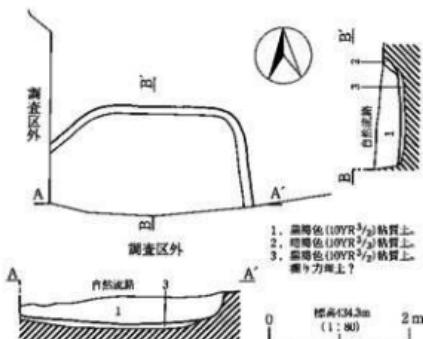
8) H 8号住居址

遺構 (第23図)

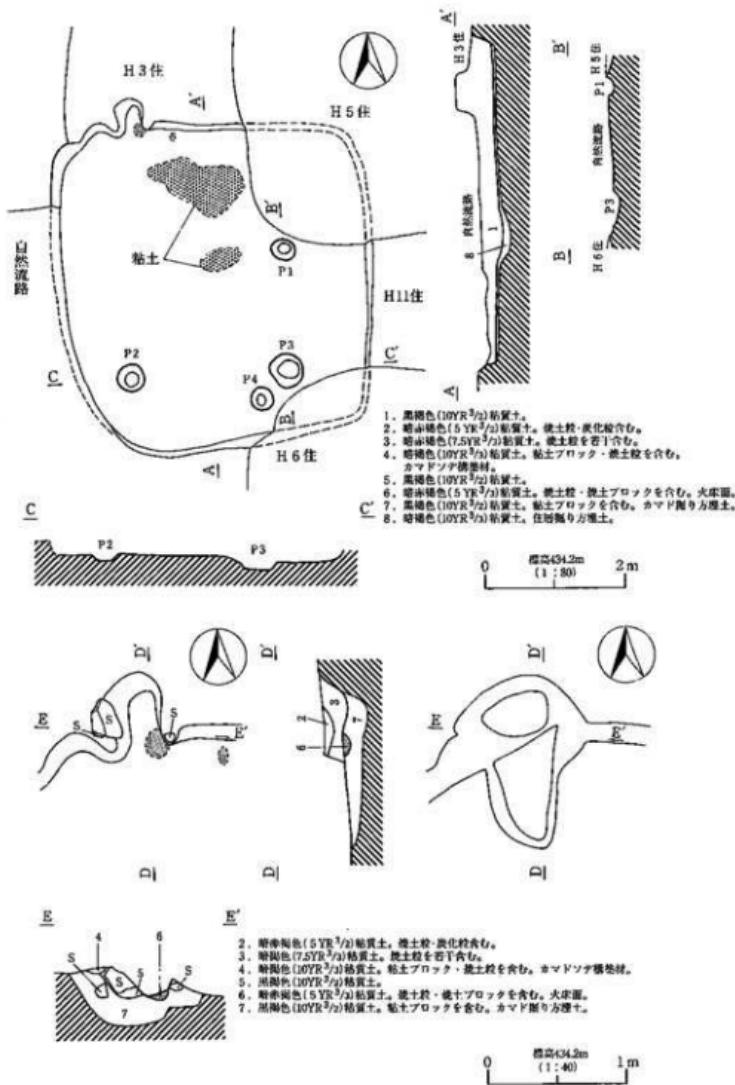
検出位置 ○あ5、○い5・6グリ

フド。重複関係 自然流路、H 3・

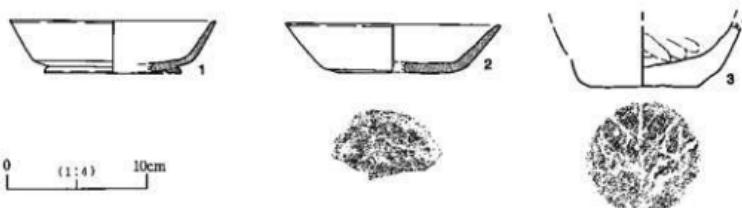
5・6号住居址に切られる。H 4・11号住居址、D 3を切る。平面形態 南西隅がやや丸くなっているが、南北4.6m、東西4.3mの隅丸方形を呈す。長軸の方位はN-3°-Wを指す。壁残高は、1~22cmを測る。自然流路よって西壁はほとんど壊されていた。覆土 黒褐色粘質土のみに被覆されていたが、H 6号住居址同様自然流路の影響で川原石のような礫を含んでいた。床面の状態 おおむね平坦で堅固な状態であった。中央よりやや北側に白色粘土が貼り床状に広がっている部分が確認できた。ピット 床面上で4基検出された。P 1~P 3が主柱穴にあたる。P 1西側に、対になるべき柱穴のピットが想定されたが、検出されなかつた。P 1は円形を呈し、深さは13~14cmを測る。P 2は円形を呈し、深さは12~14cmを測る。P 3はやや歪んだ円形を呈し、深さは16~21cmを測る。P 4は円形を呈し、深さは9~13cmを測る。カマド 北壁の西端寄りに位置する。遺存状況は良好とはいえない。火床面はわずかに残存しているのみであった。袖部の遺存度も悪く、構築材と思われる礫と粘土が一部で確認できるのみであった。主軸の方位はN-3°-Wを指す。遺物の集中は見られなかつた。遺物の出土状況 覆土中から土師器・須恵器が出土している。



第22図 H 7号住居址実測図



第23図 H8号住居址・カマド実測図



第24図 H 8号住居址出土土器実測図

遺物（第24図）

主に覆土中より遺物が出土している。そのうち図化できたものは3点である。24-1は須恵器の高台付壺である。底部のほとんどを欠損しているので切り離し技法などは不明であるが、傾きから、底部は高台底面より若干飛び出す形態になると考えられる。焼成は悪く、胎土もやや粗い。24-2は須恵器の壺である。底部外面の切り離し技法は不明であるが、手持ちヘラケズリが施されている。焼成はやや悪く、胎土も粗い。24-3は土師器の壺の底部である。胴部外面は磨耗しており、調整は不明である。内面はユビナデが施されている。底面に木葉痕が残る。

時期 本址の所属時期は、出土遺物から奈良時代（8世紀後半）に位置付けられる。

9) H 9号住居址

遺構（第25・26図）

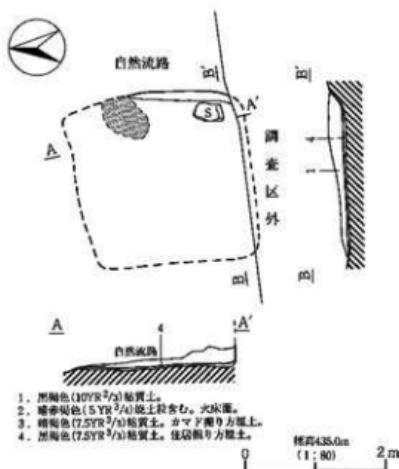
検出位置 Jく5・6、Jけ5・6グリッド。**重複関係** 自然流路に切られる。**平面形態** 北側と南側は自然流路に浸食されているためにほとんど残っていない上、南側は調査区外へ延びているため形態は覆土の残存状況から隅丸方形に推定した。そのため長軸・短軸は不明である。東西に約2.4mを測る。東西の軸方位はN-88°—Eを指す。壁残高は1~12cmを測る。壁として明確に捉えられるのは東壁の一部のみである。**覆土** 黒褐色ののみに被覆されていた。床面の状態 おおむね平坦だが堅固ではなかった。ピット 検出されなかった。カマド 東壁に位置する。遺存状態は悪く、火床面が残存するのみであった。主軸方位は不明である。**遺物の出土状態** 土師器・須恵器が出土している。カマド周辺にやや集中する。

遺物（第27図）

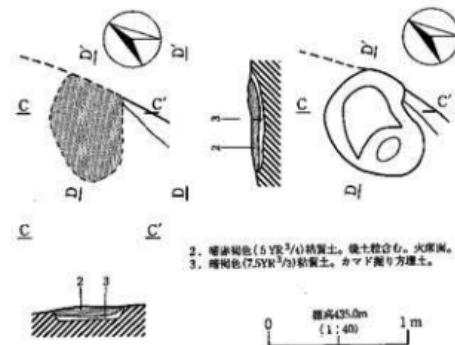
出土量は少ないが、カマド周辺、及び覆土中より土師器・須恵器が出土している。そのうち、図化できたものは須恵器の壺、高台付壺、土師器の小型壺の3点である。27-1は須恵器の壺で、

底部を欠損している。灰白色を呈し、焼成はやや悪い。27-2は須恵器の高台付壺で、口縁端部を欠損している。底部外面は糸切り痕をやや大きく残して回転ヘラケズリされ、高台が貼り付けられている。27-3は土師器の小型壺である。ロクロ整形が施されている。

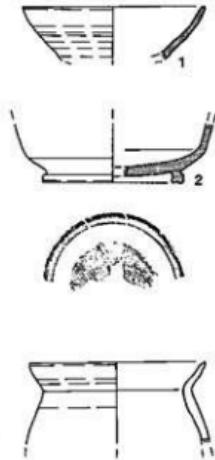
時期 本址の所属時期は、時期を判断できる遺物に乏しいが、図化できなかった土器片のなかに鍋が含まれていたことを合わせて推定すると、平安時代前半（9世紀前半）ごろに位置付けられようか。



第25図 H9号住居址実測図



第26図 H9号住居址カマド実測図



第27図 H9号住居址出土土器実測図

10) H10号住居址

遺構（第28図）

検出位置 Oい7グリッド。重複関係 自然流路に切られる。P11・12・18を切る。平面形態

検出できたのは西壁と北壁の一部であり、それ以外の部分は調査区外に延びている。規模、長軸・短軸、軸方位は不明であるが、北西隅の状況から隅丸方形を呈すと考えられようか。壁残高は20~27cmを測る。覆土 角亜礫を含む黒褐色土のみに被覆されていた。床面の状態 おおむね平坦だが堅固な状況ではなかった。ピット 検出されなかった。カマド 検出されなかった。遺物の出土状況 覆土中より土器片が数点出土したのみである。図化できるものは出土しなかった。

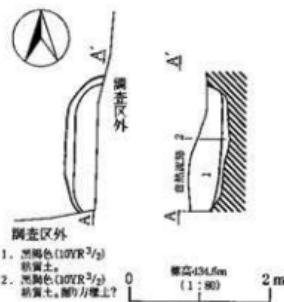
時期 本址は出土遺物がほとんどなく、所属時期は不明である。また、遺構の大部分が調査区外側に位置しているため、住居址ではなく土坑などの別遺構であることも考えられる。しかし、H 7号住居址のように平坦面があり、掘り方を持つことから積極的に解釈して住居址とした。

11) H11号住居址

遺構（第29図）

検出位置 Jあ5・6グリッド。重複関係 自然流

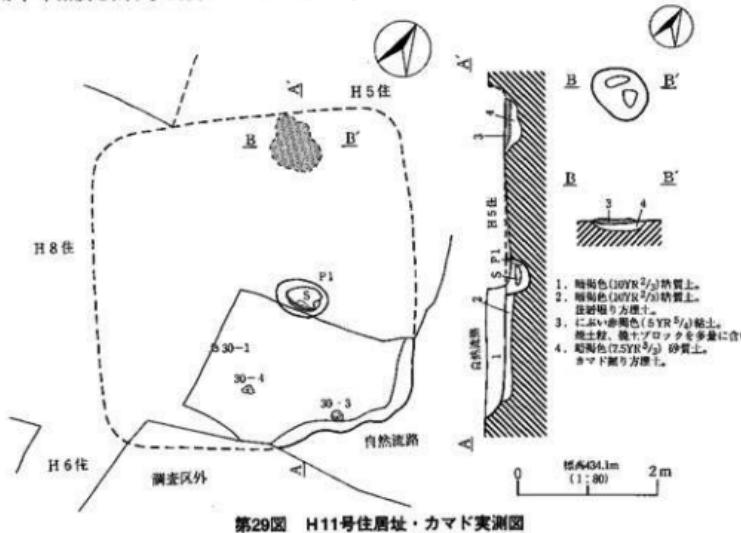
路、H 5・6・8号住居址に切られる。P90を切る。平面形態 塙面が残存しているのは住居址南東隅の東壁と南壁の一部のみで、壁残高は22~32cmを測る。他の部分は別遺構にすべて壊されていた。本址はこの壁面と、カマドに伴うと思われる焼土の位置から、一辺約4.5mの隅丸方形の住居址として範囲を推定した。南北の軸方位はN-25°—Wを指す。覆土 暗褐色の粘質土のみに被覆されていた。床面の状態 おおむね平坦で堅固な状態であった。ピット H 5号住居址掘り方下から、本址床面に一部かかる形で1基検出された。このピットは、橢円形を呈し、深さは29~34cmを測る。また、ピット覆土中から約50×30cmの平石が出土している。このピットが主柱穴として捉えられるかは不明である。カマド H 5号住居址掘り方下より、火床面と思われる焼土が構築材の一部と思われる少量の粘土ブロックとともに検出され、北カマドとして認定した。本址の範囲は、この焼土の北端から南塙までの長さから推定している。よってこのカマドは、北壁中央やや西よりに位置しているということになる。焼土長軸の軸方位はN-45°—Wを指す。袖や煙道といった施設は確認できなかった。遺物の出土状況 出土量は少ないが、覆土中より土器・須恵器が出土している。



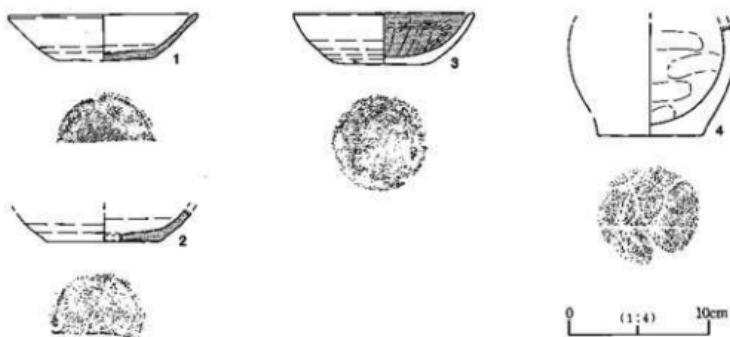
第28図 H10号住居址実測図

遺物（第30図）

本址南東部の覆土中から土師器・須恵器が出土しており、そのうち図化できたものは4点である。30-1・2は須恵器の坏で底部外面は回転糸切り未調整である。30-3は土師器の坏でいわゆる黒色土器である。ロクロ整形され、底部外面は糸切り痕がやや残るが、手持ちヘラケズリが施され、腰部外面もヘラケズリされている。内面は黒色処理され、丁寧にヘラミガキが施されており、表面にやや光沢がある。30-4は土師器の小型甕である。磨耗により外面調整は不明であるが、木葉痕を残す。内面はヨコナデされる。



第29図 H11号住居址・カマド実測図



第30図 H11号住居址出土土器実測図

時期 本址の所属時期は出土遺物や切り合ひ関係から奈良時代（8世紀中葉～後半）に位置付けられる。

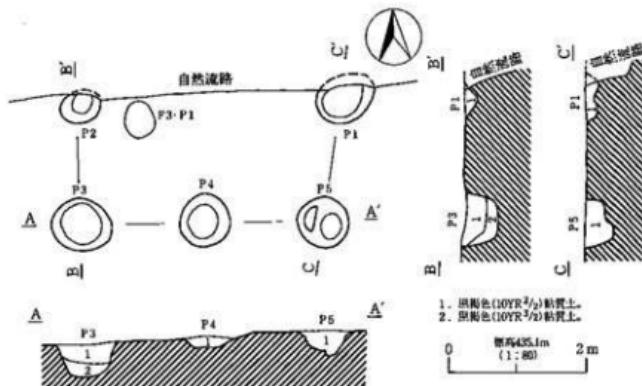
第2節 掘立柱建物址

1) F 1号掘立柱建物址

遺構（第31図）

検出位置 Oく3・4、Oけ3・4グリッド。重複関係 P1・2が自然流路に切られる。F 3号掘立柱建物址と重複するが、新旧関係は不明である。P4がP61を切る。P5がP73を切る。
平面形態 自然流路に切られているが、2間×2間以上の側柱式の建物になると想われる。柱間は南列約3.5mを測る。東西の軸方位は、N-89°-Eを測る。覆土 いずれも黒褐色土に被覆されている。柱痕は確認できなかった。ピット いずれも円形、あるいは梢円形を呈す。P1は自然流路に切られる梢円形のピットで深さ10~19cmを測る。P2は自然流路に切られる円形のピットで深さ9~17cmを測る。P3は梢円形を呈し、深さは43~52cmを測る。P4は円形を呈し、深さは11~19cmを測る。P5はテラスをもつ円形のピットで深さは15~46cmを測る。遺物 出土していない。

時期 本址の所属時期は出土遺物がなく、不明である。

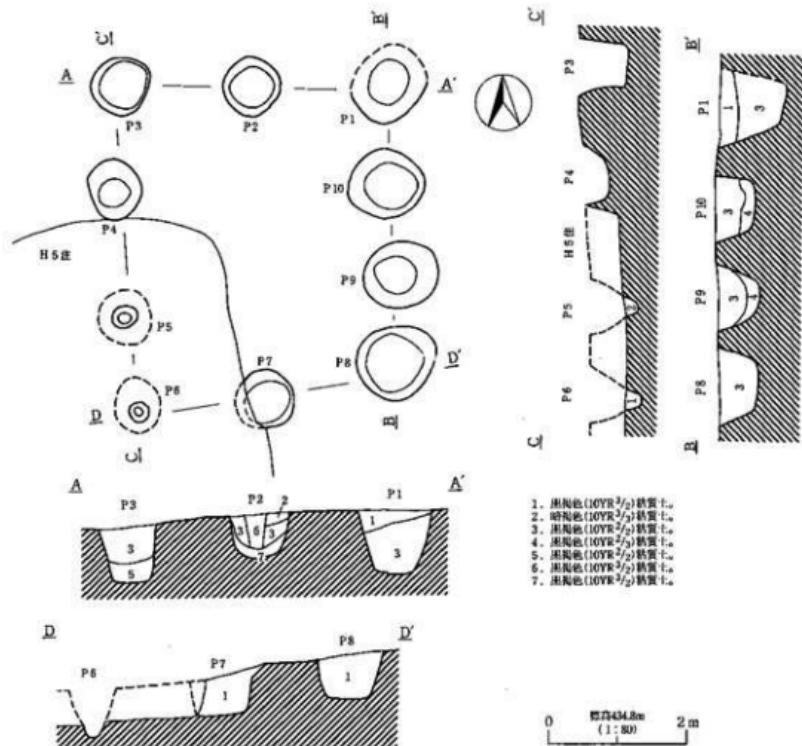


第31図 F 1号掘立柱建物址実測図

2) F 2号掘立柱建物址

遺構(第32図)

検出位置 J c 3・4・5、O a 3・4・5グリッド。重複関係 P 4・5・6・7がH 5号住居址に切られる。P 4がP 98を切る。P 1がP 21を切る。P 7がQ 1号特殊遺構を切る。平面形態 3間×2間の側柱式の建物である。柱間は北列約3.8m、南列約3.7m、東列約4.2m、西列4.6mを測り、主軸方位はN-4°-Wを指す。覆土 砂を含む黒褐色粘質土と暗褐色粘質土に被覆されていた。P 2では柱痕が確認され、砂を含まない黒褐色粘質土が入っていた。ピット P 5・6はH 5号住居址に切られているため形態や深さは不明であるが、それ以外のものはやや歪んだ円形を呈す。P 1は深さ83~95cmを測る。P 2は深さ55~77cmを測る。P 3は深さ75~85cmを測る。P 4は深さ37~43cmを測る。P 7は深さ37~59cmを測る。P 8は深さ46~67cmを測る。



第32図 F 2号掘立柱建物址実測図

P9は深さ51~62cmを測る。P10は深さ50~67cmを測る。遺物 出土していない。

時期 本址の所属時期は、遺物がないため不明であるが、H5号住居址（奈良時代末～平安時代前半）に切られていることから、それ以前のものといえる。

3) F3号掘立柱建物址

遺構（第33図）

検出位置 Jけ3・4、Jこ4

グリッド。重複関係 P2・6が

H1号住居址に切られる。F1号
掘立柱建物址と重複するが新旧関
係は不明である。平面形態 1
間×1間の側柱式の建物である。

柱間は、北列約2.2m、南列約2.3
m、東列約2.5m、西列約2.2mを
測る。東列の軸方位はN-1°—
Wを指す。覆土 黒褐色粘質土に
被覆されていた。柱痕は確認され
なかった。ピット P1は楕円形
を呈し、深さ16~21cmを測る。P

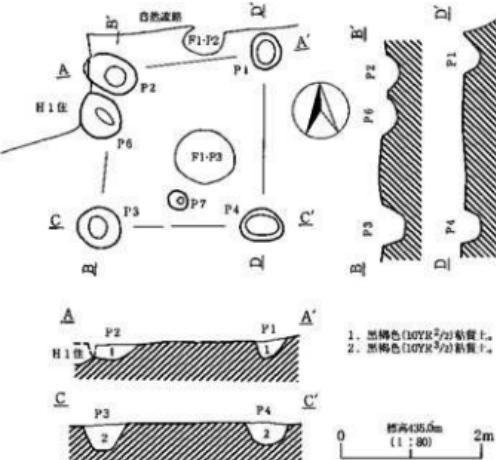
2は楕円形を呈し、深さ18~22cmを測る。P3は円形を呈し、深さ28~40cmを測る。P4は楕円形を呈し、深さ22~30cmを測る。P6・7は本址に伴うか不明である。遺物 P2より土師器が
数点出土しているが、いずれも網片である。図化できるものは出土していない。

時期 出土遺物が少なく、本址の所属時期は不明であるが、H1号住居址（平安時代前半）に切
られていることから、それ以前に属すると思われる。

4) F4号掘立柱建物址

遺構（第34図）

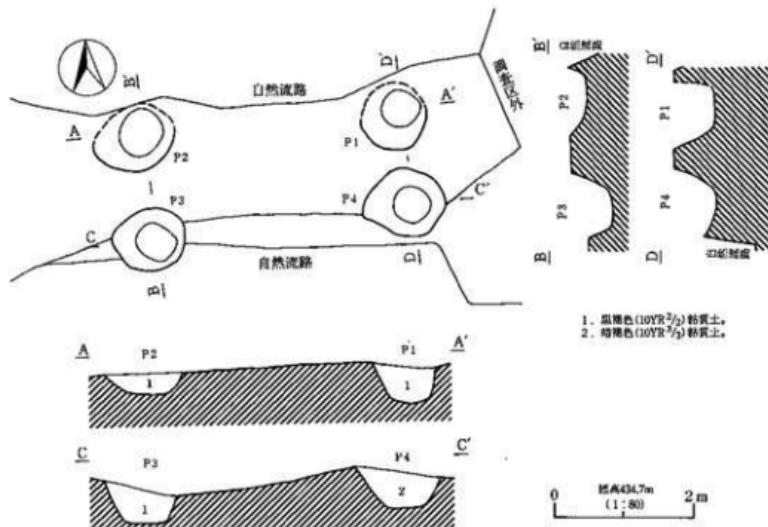
検出位置 Oあ2・3、Oい2・3グリッド。重複関係 P3・4が自然流路に切られる。P
3がP21に切られる。P2がP55を切る。平面形態 自然流路の方に柱穴が延びていると思われ
るため不明である。覆土 黒褐色粘質土と暗褐色粘質土に被覆されていた。柱穴は確認できなか



第33図 F3号掘立柱建物址実測図

った。ピット いずれもやや亜んだ椭円形を呈す。P 1 は深さ46~53cmを測る。P 2 は深さ16~25cmを測る。P 3 は深さ54~62cmを測る。P 4 は深さ49~65cmを測る。遺物 出土しなかった。

時期 出土遺物がないため、所属時期は不明である。



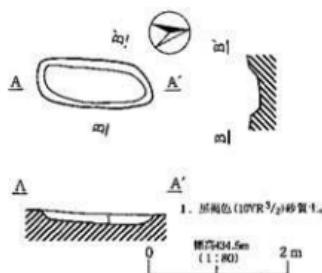
第34図 F 4号標立柱建物址実測図

第3節 土坑址

1) D 1号土坑址

構造 (第35図)

検出位置 Oう2グリッド。重複関係 D 2を切る。平面形態 長軸1.4mを測る長椭円形を呈し、長軸方位はN-7°—Eを指す。暗褐色の砂質土に被覆され、深さは6~21cmを測る。遺物出土していない。



第35図 D 1号土坑址実測図

時期 出土遺物がないため不明である。

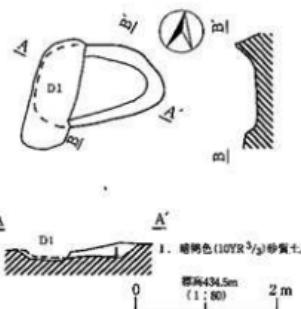
2) D 2号土坑址

遺構 (第36図)

検出位置 Oい・う2グリッド。重複関係 D 1に切られる。平面形態 東側をD 1に切られているが、東西約1.8mの梢円形を呈すると思われる。長軸方位は、N-86°—E?を指す。暗褐色の砂質土に被覆され、深さは16~27cmを測る。

遺物 出土していない。

時期 出土遺物がないため不明である。



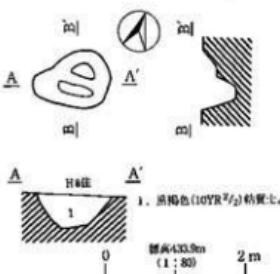
第36図 D 2号土坑址実測図

3) D 3号土坑址

遺構 (第37図)

検出位置 Oい5・6グリッド。重複関係 H 8号住居址に切られる。平面形態 H 8号住居址掘り方より検出されたため、平面形態や規模は不明である。残存した部分から推定すると、長軸方位N-68°—Eを指す歪んだ梢円形を呈すると思われる。黒褐色の粘質土に被覆され、底面は北側にテラスを有する。遺物 覆土中より土師器の甕と思われる土器片が数点出土したが、図化できるものはなかった。

時期 出土遺物が少ないため不明であるが、切り合い関係からH 8号住居址（奈良時代）以前に属するといえる。



第37図 D 3号土坑址実測図

第4節 焼土址

1) 1号焼土址

遺構 (第38図)

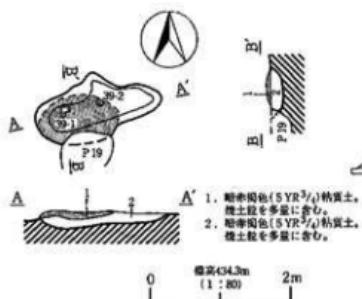
検出位置 Oい4グリッド。重複関係 P 19に切られる。H 4号住居址を切る。平面形態 P 19に切られているが、焼土部分は長軸1.1mを測る梢円形を呈すると考えられる。また、焼土の下に掘り方を有する。掘り方は、焼土粒を若干含む暗赤褐色土に被覆されている。P 19に切られ

ているが、長軸1.8mの歪んだ橢円形を呈すると考えられる。本址は住居址に伴うものとも考えられるが、床面や柱穴が検出されなかったので焼土址として扱った。長軸方位はN-78°—Eを指す。

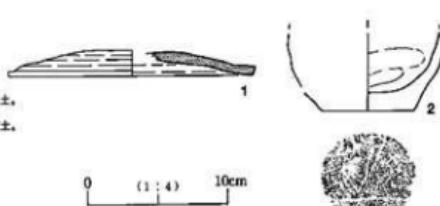
遺物（第39図）

図化できたものは2点である。39-1は須恵器の蓋で、つまみを欠損している。全体的に平らにつぶれたような器形をしており、胎土には砂粒がやや含まれている。39-2は土師器の壺の底部である。外面は磨耗し、調整は不明であるが、木葉痕を残す。内面はナデ調整が施されている。胎土は径1~2mmの石英粒を多量に含んでおり、粗い。

時期 出土遺物が少ないため、所属時期の判定は困難であるが、H4号住居址（古墳時代後期後半～奈良時代前半）を切っていることから、それ以降に属するといえる。



第38図 1号焼土址実測図



第39図 1号焼土址出土土器実測図

第5節 特殊遺構

1) Q 1号特殊遺構

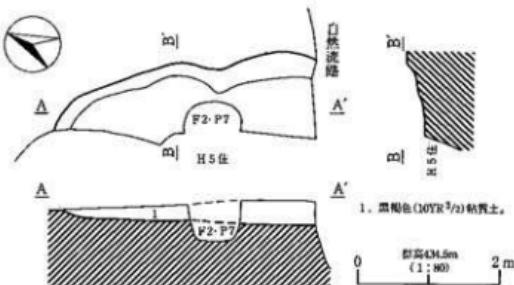
遺構（第40図）

検出位置 Oあ4・5グリッド。重複関係 自然流路、H5号住居址、F2号掘立柱建物址、P53に切られる。平面形態 東壁が遺存しているのみのため不明である。東壁の立ち上がりは明確ではなく、西へ緩やかに下がっている。本址は住居址の可能性もあるが、遺存している東壁は歪み、床面と言えるような平坦面がないことから特殊遺構として扱った。

覆土 黒褐色粘質土に被覆されているのみであった。

なく、固化できるものは出土しない。

時期 遺物の出土量が少ないと
め不明であるが、H 5号住居址
とF 2号掘立柱建物址に切られ
ていることから、それ以前に属
するといえる。

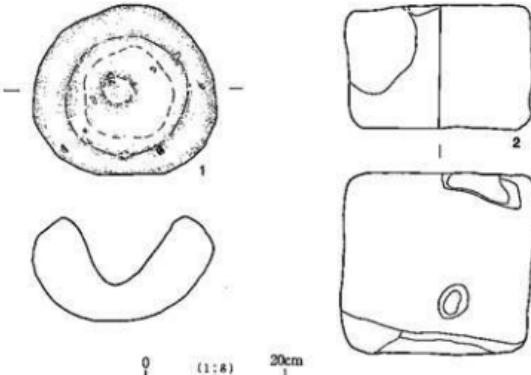


第40図 Q 1号特殊遺構実測図

第6節 ピット、及び遺構外出土遺物

遺物（第41図）

ここでは、ピットと遺構外より出土した遺物で固化できたものを示した。41-1はP 1より出土した石臼である。多孔質の安山岩が用いられており、上から見ると径約26cmの歪んだ円形を呈する。器高は15.0cmを測る。時期は不明であるが、P 1がH 1号住居址（奈良時代末～平安時代前半）を切っていることから、それ以降のものといえる。41-2は五輪塔の地輪である。自然流路内を重機で掘り下げた際
に出土したため、正確な位
置は不明であるが、Jけ5
グリッド周辺から出土した。
空風輪・火輪・水輪は出土
しなかった。凝灰岩製で最
大幅26.7cm、器高13.0cmを
測る。墨書の痕跡らしきも
のが1面で確認できたが、
それが梵字であったのかは
不明である。



第41図 ピット・グリッド出土遺物実測図

第V章 総括

調査面積約360m²という狭い面積の上、調査区内の半分以上を自然流路が占め、それによって壊されている遺構も多かったけれども、古墳時代後半から平安時代にかけての竪穴住居址11棟、掘立柱建物址4棟などといった遺構が検出された。このことは、先述のように寺浦遺跡や宮上遺跡で確認された集落がここまで広がっていたことを示すものであり、今回報告した遺構以外にも自然流路によって浸食破壊されてしまった遺構の多いことが、考えられる結果が得られた意義は高いといえよう。今回の調査の大きな成果となった。

竪穴住居址では一辺2.0m前後の小さなものから5m程の規模のものまで規模にややばらつきが見られた。柱穴は検出されなかったものもあるが、検出されたものでも竪穴住居址で基本的に見られる方形に4本配される構造の住居址は確認されなかつた。4本主柱穴のうち1本欠く形で3本検出された住居址が3棟（H3・5・8号住居址）確認された。今回検出された住居址の特徴の一つといえる。また、H3・4・5・6・8・11号住居址は重複しているが、その中で一番古いH4号住居址（古墳時代後期後半～奈良時代前半）からH3号住居址（平安時代前半）まで確認できることから、この場所に比較的長期にわたって集落が存在していたことを示している。また、今回1号焼土址として扱った遺構は、床面や柱穴こそ検出されなかつたものの、住居址の可能性も否定できない。

掘立柱建物址では自然流路の浸食で4棟のうち2棟が規模を把握できなかつたが、F3号掘立柱建物址のようにピットの掘り方が小さく浅い1間×1間の小型のものから、F2号掘立柱建物址のような掘り方が大きく深い3間×2間のやや大型のものまで検出された。F4号掘立柱建物址は、規模は不明であるが、ピットの掘り方が大きく深いため、F2号掘立柱建物址のような、やや大型の掘立柱建物址が想定できそうである。しかし、これらの各遺構を見ると、自然流路の浸食や、切り合いによりプランが明確につかみきれなかつた遺構も多かったのは残念であった。

出土遺物では、土師器の壺・高壺・甕・円筒形土製品、須恵器の壺・高台付壺・甕・凸帯付四耳壺、石臼、五輪塔の地輪などが出土した。これらのうち、土師器と須恵器の壺・高台付壺については、中之条遺跡群内での調査での出土遺物と類似したものが多い。とくに、『宮上遺跡II』や『寺浦遺跡II』でも指摘されている、円筒形土製品や、焼成の悪い須恵器の壺・高台付壺は今回の調査でも出土した。胎土についても同様に、雲母や石英を多く含んだ土師器が出土している。今回検出された集落と、中之条遺跡群内で検出された集落との共通性を示すものといえよう。

一方で、今回の調査では、須恵器の凸帯付四耳壺でも短頸壺のように口縁部が短く立ち上がる器形のものが出土したが、これは管見では他に類例のないものである。今後の類例の増加に期待

したい。

ほかにも、出土位置は不明であるものの、五輪塔の地輪が出土している。これは自然流路を重機で掘削している時に出土したものであるが、自然流路に流されたものと考えると、上流にあたる調査区の東側に五輪塔が造立されていたことが考えられる。また、そうだとすると自然流路がいつ頃からここを流れていたのかもおのずと決まってくるといえる。

以上のことから、今回確認された集落は大型の竪穴住居址や掘立柱建物址はなく、また凸帯付四耳壺を別にすれば特殊な遺物も出土しなかったといえる。そのことから、この之中之条遺跡群とその周辺に広がると思われる集落の中で考えれば、今回の調査ではその集落の一般的な部分が検出されたということであり、それらの集落を統括した郷家ないし豪族の居館といった支配層に関わる施設は別のところ（寺浦遺跡の周辺か？）に存在していたと考えられる。

最後に、今回の調査に深く理解を示し、全面的に協力して頂いた原因者の東信医療生活協同組合と、酷暑の中を発掘調査に携わった方々、及び整理作業に携わった方々に対し心から感謝の意を表したい。

引用・参考文献（五十音順・敬称略）

- 小平 光一 1996「魚崎堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡」坂城町教育委員会
1996『上町遺跡II』坂城町教育委員会
坂城町教育委員会 1978『開鉄製鉄遺跡－第1次調査報告－』
坂城町教育委員会 1979『開鉄製鉄遺跡－第2次調査報告－』
助川 朋広 1993『宮上遺跡II』坂城町教育委員会
1994『東裏遺跡II・青木下遺跡』坂城町教育委員会
1995『塚田遺跡II』坂城町教育委員会
1996『寺浦遺跡II』坂城町教育委員会
2000『開鉄遺跡III』坂城町教育委員会
助川 朋広・小平光一 1996『町内遺跡発掘調査報告書』坂城町教育委員会
岡 孝一 1966「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌』第51巻第3号
鳥羽 英雄 1999「第8章 成果と課題 第1節 屋代遺跡群における古代の土器」「上信越自動車道埋蔵文化財
発掘調査報告書26」(財)長野県埋蔵文化財センター
森嶋 稔ほか 1981『坂城町誌』中巻 歴史編(一)
柳沢 亮 1998「第5節 開鉄遺跡」「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告2」(財)長野県埋蔵文化財センター
若林 卓 1999「第9章 東平古墳群」「第11章 観音平経塚」「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21」
(財)長野県埋蔵文化財センター

表1 出土土器観察表

番号	種別	器形	法量(cm)	残存度	調査	胎土	備考
7-1	須恵器	坏	14.2 8.2 4.8	ほぼ完形 口縁~底部2/5	外面:ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整 内面:ロクロヨコナデ	外面・内面・断面:7.5GY6/1 緑灰色土。	
7-2	須恵器	坏	<12.8> 6.4 (4.2)	口縁~底部2/5	外面:ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整 内面:ロクロヨコナデ	外面・内面・断面:10YR6/1 緑灰色土。	
7-3	須恵器	坏	<13.0> 7.2 2.7	口縁~底部1/2	外面:ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整 内面:ロクロヨコナデ	外面・内面・断面:7.5GY6/1 緑灰色土。	
7-4	須恵器	坏	<12.0> (6.6) (3.5)	口縁~底部1/4	外面:ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整 内面:ロクロヨコナデ	外面・内面・断面:7.5GY6/1 オリーブ灰色土。	接合痕あり
7-5	土師器	坏	<13.2> (5.0) —	口縁~底部1/3	外面:ナデ 内面:墨色処理 ヘラミガキ?	外面:10YR5/3 にぶい黄褐色土。 内面:— 断面:10YR5/3 にぶい黄褐色土。	
7-6	土師器	甕	<12.4> — —	口縁~胴部1/4	外面:ロクロヨコナデ 内面:ヘラケズリ	外面:10YR6/6 明黄褐色土。 内面:10YR7/4 にぶい黄褐色土。 断面:10YR6/6 明黄褐色土。	
7-7	土師器	甕	— 4.6 —	底部完形	外面:ロクロヨコナデ 底部 静止糸切り 内面:ロクロヨコナデ	外面・内面・断面:10YR7/4 にぶい黄褐色土。	
9-1	土師器	坏	<15.0> 7.2 3.8	口縁~底部2/3	外面:ロクロヨコナデ→ヘラ ケズリ 底部 回転糸切り未調整 内面:ロクロヨコナデ 黒色処理	外面:10YR6/4 にぶい黄褐色土。 内面:— 断面:10YR6/4 にぶい黄褐色土。	
11-1	須恵器	突唇付西耳壺	<14.4> — —	口縁~胴部1/5	外面:ロクロヨコナデ 内面:ロクロヨコナデ	外面:5G4/1 緑灰色土。 内面:10GY6/1 緑灰色土。 断面:10GY6/1 緑灰色土。	
14-1	土師器	坏	<14.0> (6.0) (3.2)	口縁~底部1/5	外面:消耗により不明 内面:黑色処理 ヘラミガキ?	外面:7.5YR5/3 にぶい褐色土。 内面:— 断面:7.5YR5/3 にぶい褐色土。	
14-2	須恵器	高台唇坏	<14.5> (10.6) (3.6)	口縁~底部2/3	外面:ロクロヨコナデ 外面部 底部 切り離し(技法不明)→ 回転ヘラケズリ 高台貼り付け	外面:10BG4/1 墓青灰色土。 内面:10BG4/1 墓青灰色土。 断面:10YS/1 オリーブ灰色土。	
14-3	土師器	高杯	16.4 — —	环部ほぼ完形 脚部欠損	环部:外面・内面 ヘラミガキ 脚部:外面 ヘラミガキ 内面 ナデ	外面:10YR7/4 にぶい黄褐色土。 内面:10YR5/3 にぶい黄褐色土。 断面:10YR7/4 にぶい黄褐色土。	カマド支脚 に転用
16-1	土師器	小型鉢?	8.4 5 9.1	完形	外面:ナデ 内面:ヨコナデ 底部:工具痕	外面・内面・断面:10YR7/4 にぶい黄褐色土。	外ヌス? 付蓋
16-2	土師器	甕	8.4 5.0 8.0	底部完形	外面:ヘラナデ 底部 木素痕 内面:ナデ	外面・内面・断面:10YR7/4 にぶい黄褐色土。	カマド支脚 に転用
16-3	土師器	甕	— 8.7	底部完形~ 胴部	外面:ナデ 底部木素痕 内面:ナデ	外面・内面・断面:10YR6/4 にぶい黄褐色土。	
16-4	土師器	円筒形土製品	— 11.4	胴部~底部	外面:腰位ヘラナデ 卷き上げ痕 残る 底部木素痕 内面:ナデ	外面・内面・断面:10YR6/6 明黄褐色土。	
17-1	土師器	甕	<20.9> 7.8 36.7	口縁~底部2/3	外面:ナデ 底部木素痕を一部 ナデ消し 内面:ナデ	外面・内面・断面:10YR6/4 にぶい黄褐色土。	外ヌス 付蓋
19-1	須恵器	坏	14.6 7.2 4.3	ほぼ完形	外面:ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整 内面:ロクロヨコナデ	外面・内面・断面:7.5Y6/2 灰オリーブ色土。	
19-2	須恵器	坏	13.4 6.5 3.5	ほぼ完形	外面:ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整 内面:ロクロヨコナデ	外面・内面・断面:10GY5/1 緑灰色土。	
19-3	須恵器	坏	<13.0> (7.8) 2.8	LI縁~底部1/4	外面:ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整 内面:ロクロヨコナデ	外面・内面・断面:2.5GY6/1 オリーブ灰色土。	

表2 出土土器観察表

番号	種別	器形	法徳(cm)	残存度	調査	胎土	備考
19-4	須恵器	环	<12.8) 6.5 3.7	L縁~底部1/4	外面:クロヨコナデ 底部:回転糸切り未調整 内面:クロヨコナデ	外面・内面・断面:10Y5/1 灰色土。	内面付着物 あり
19-5	須恵器	环	— (6.8) —	底部1/4	外面:クロヨコナデ 底部:回転糸切り未調整 内面:クロヨコナデ	外面・内面・断面:10GY6/1 緑灰色土。	
19-6	須恵器	高台付环	<14.6) (10.0) 4.2	口縁~底部1/3	外面・内面:クロヨコナデ 外面底部:糸切り→回転ヘラケズリ →高台貼り付け	外面・内面・断面:2.5GY6/1 緑灰色土。	
19-7	須恵器	高台付环	— <8.8) —	底部1/2	外面・内面:クロヨコナデ 外面底部:糸切り→回転ヘラケズリ →高台貼り付け	外面・内面・断面:7.5GY5/1 緑灰色土。	
19-8	須恵器	高台付环	<15.4) (10.8) 4.2	口縁~底部1/2	外面・内面:クロヨコナデ 外面底部:糸切り→(技法不明)→ 回転ヘラケズリ→高台貼り付け	外面・内面・断面:2.5GY5/1 オリーブ灰色土。	
21-1	須恵器	环	13.4 7.9 3.2	完形	外面:クロヨコナデ 底部:糸切り→(技法不明) 内面:クロヨコナデ	外面:5GY5/1 オリーブ灰色土。 内面:2.5GY6/1 オリーブ灰色土。 断面:	外面・内面 火葬あり
24-1	須恵器	高台付环	<14.8) (4.9) (3.8)	口縁~底部1/4	外面・内面:クロヨコナデ 外面底部:糸切り→(技法不明)→ 回転ヘラケズリ→高台貼り付け	外縁:外側・内面・断面:10Y5/2 オリーブ灰色土。 高台部 外面・ 内面・断面:7.5Y6/3 オリーブ黄色土。	
24-2	須恵器	环	<15.4) (8.3) (3.5)	口縁~底部1/4	外面・内面:クロヨコナデ 外面底部:糸切り→(技法不明) 内面:手持ちヘラケズリ(切 離し・技法不明)	外面:10Y6/1 灰色土。 内面:10Y6/1 灰色土。 断面:7.5Y5/3 灰オリーブ色土。	
24-3	土師器	壺	— 7.4 —	底部完形	外面:透光により不明 底部:木葉痕 内面:ヨコナデ	外面:7.5YR4/4 黄褐色土。 内面:7.5YR5/4 にい・褐色土。 断面:7.5YR4/1 灰灰色土。	
27-1	須恵器	环	<13.0)	口縁部2/3	外面・内面:クロヨコナデ	外面・内面・断面:10YR7/1 灰白色土。	
27-2	須恵器	高台付环	— 10.1	底部1/2	外面・内面:クロヨコナデ 外面底部:糸切り→回転ヘラケズリ →高台貼り付け	外面・内面・断面:7.5Y6/2 灰オリーブ色土。	
27-3	土師器	小形壺	(12.6) — —	口縁~腹部	外面・内面:クロヨコナデ	外面:2.5Y6/4 にい・黄色土。 内面:2.5YR5/3 にい・褐色土。 断面:2.5Y6/4 にい・黄色土。	
30-1	須恵器	环	<13.4) (7.0) 3.3	口縁~底部1/3	外面:クロヨコナデ 底部:回転糸切り未調整 内面:ヨコナデ	外面・内面・断面:5GY6/1 オリーブ灰色土。	
30-2	須恵器	环	<8.1) —	底部1/3	外面:クロヨコナデ 底部:回転糸切り未調整 内面:ヨコナデ	外面・内面・断面:5GY5/1 オリーブ灰色土。	
30-3	土師器	环	13.1 7.0 3.7	L縁~底部2/3	外面:クロヨコナデ 底部:糸切り →一部手持ちヘラケズリ(底部 含む) 内面:黑色處理 ヘラミガキ	外面:7.5YR5/4 にい・褐色土。 内面:— 断面:7.5YR5/4 にい・褐色土。	
30-4	土師器	小型壺	— 7.6	底部完形	外面:透光により不明 底部:木葉痕 内面:ヨコナデ	外面・内面・断面:10YR6/4 にい・黄褐色土。	
39-1	須恵器	壺	17.6 — —	天井~口縁部 1/2	外面・内面:クロヨコナデ	外面:2.5GY6/1 オリーブ灰色土。 内面:5G4/1 暗緑灰色土。 断面:2.5GY6/1 オリーブ灰色土。	
39-2	土師器	壺	— 6.5 —	底部完形	外面:透光により不明 底部:木葉痕 内面:ヨコナデ	外面・内面・断面:7.5YR6/4 褐色土。	



北川原遺跡Ⅱ航空写真



H1号住居址（西より）



H1号住居址カマド（西より）



H 2号住居址（西より）



H 3号住居址（南より）



H 4号住居址（南より）



H 4号住居址カマド（南より）



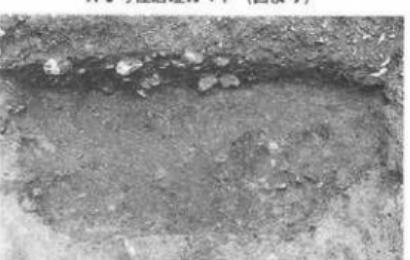
H 5号住居址（西より）



H 5号住居址カマド（西より）



H 6号住居址（西より）



H 7号住居址（北より）



H 8号住居址（南より）



H 8号住居址カマド（南より）



H 9号住居址（西より）



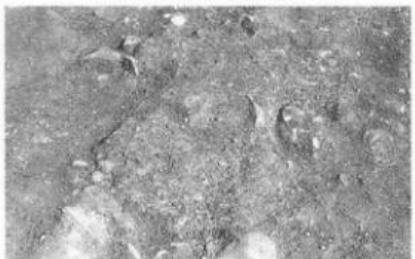
H 9号住居址カマド（西より）



H 10号住居址（西より）



H 11号住居址（南より）



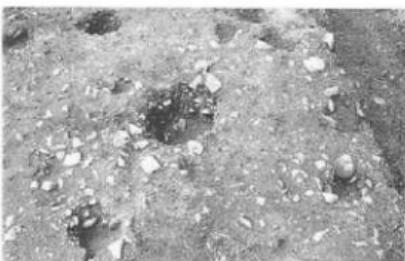
H 11号住居址カマド（南より）



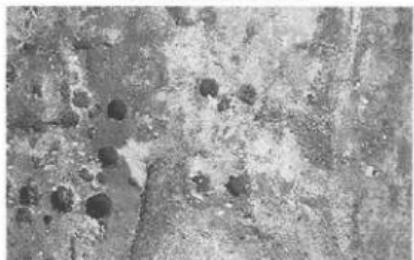
F 1号掘柱建物址（北より）



F 2号権柱建物址（東より）



F 3号権柱建物址（東より）



F 4号権柱建物址（航空写真）



D 1号土坑址（東より）



D 2号土坑址（南より）



D 3号土坑址（南より）



1号焼土址（南より）



Q 1号特殊造構（西より）



H 1号住居址 7-1



H 3号住居址 11-1



H 4号住居址 15-3



H 4号住居址 14-3



H 4号住居址 17-1



H 4号住居址 16-3



H 4号住居址 16-4 (胴部)



H 4号住居址 16-4 (底部)



H 5号住居址 19-1



H 5号住居址 19-6



H 6号住居址 21-1



P 1 41-1



41-2



H11号住居址 30-3



あとがき

北川原遺跡Ⅱの発掘調査報告書を、ここに上梓することができた。発掘調査の最大の責務を果たし終えて、ひとまず安堵している。

今回の北川原遺跡Ⅱの発掘調査は、東信医療生活協同組合の診療所建設事業に先立って、破壊のやむなき部分である360m²を対象に実施したものである。発掘調査面積がわずか360m²と狭いのは、原因者の東信医療生活協同組合と土地所有者、坂城町教育委員会生涯学習課などによる保護協議、試掘、再度の保護協議により、破壊を最小限度に抑えることができたからであり、発掘調査以前の成果であるといえる。

調査によって、古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居址11、掘立柱建物址4、土坑址、焼土址、特殊遺構、ピットなどの遺構と、それらに伴う土器などの遺物が検出された。また、調査面積の半分以上を占める自然流路の跡が検出され、遺構の多くはこの自然流路によって破壊されていることが分かった。北川原遺跡は寺浦遺跡や上町遺跡などとともに広範な中之条遺跡群を構成するが、この遺跡群は御堂川によって形成された扇状地の扇尖部に所存する。西流してきた御堂川は、この遺跡群の所存する地点の東で流れの向きを北西に変え、北側の縫合線を流れているが、古墳時代後期から平安時代にかけての頃はまだ扇状地の形成時期であり、居住地としては必ずしも安定した場所ではなかったことを物語っている。

南方の谷川は御堂川と同じように西流するが、途中で方向を変えることなくそのまま扇状地の中央を貫流して千曲川に至っている。川としての勢いは御堂川より大きく、谷川扇状地を主とし、御堂川扇状地を従とする複合扇状地を形成し、千曲川の流路を西に寄せてしまうほどである。しかし、川の勢いと流域の開発は比例しなかったらしく、坂城町に所在する古墳71基の内の30基が御堂川流域に集中しており、町内最大の古墳群を形成している。5世紀前半に築かれたことが判明し坂城町最古の古墳となた仮称東平1・2号墳も含まれる。10基よりなる古墳群をもつ谷川流域と比べて開発の規模の違いが分かるだろう。このことから、古墳時代以来の坂城開発の中心が御堂川流域にあったことが知られるが、その伝統が受け継がれて、古代坂城郷をつくる三条のひとつであり郷の中核をなしたと考えられる「中条」として存立したのである。

北川原遺跡Ⅱの発掘調査は中之条遺跡群のごく一部を調査したに過ぎない。調査の結果も必ずしも華々しいものではなく、遺跡の縁辺部を探っただけかもしれない。けれども、古代坂城郷の中核と目される中条の広がりの一端を確実に把握できた点で、その成果は小さくない。

今回の発掘調査にあたりご理解ご協力いただいた東信医療生活協同組合をはじめ関係機関・関係者の皆さんに、心から敬意と謝意を申し上げる。また、現場作業に従事された皆さん、ご指導ご助言くださった皆さんに感謝申し上げてあとがきとしたい。

報告書抄録

ふりがな	なかのじょういせきぐんきたがわらいせきに						
書名	中之条遺跡群北川原遺跡Ⅱ						
復書名	長野県埴科郡坂城町東信医療生活協同組合診療所建設事業に係る緊急発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第17集						
編集者名	塙入秀敏・齋藤達也						
編集機関	坂城町教育委員会						
所在地	〒389-0602 長野県埴科郡坂城町大字中之条2648 TEL0268-82-2069						
発行年月日	2001年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯 °'"	東經 °'"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
きたがわら 北川原 いせき 遺跡Ⅱ	はにしなぐん 埴科郡 さかさまち 坂城町 おおあざなかのじょう 大字中之条	1521	36° 26' 42"	138° 11' 53"	2000年6月26日 ~ 2000年8月8日	360m ²	診療所建 設に伴う 事前調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
北川原遺跡Ⅱ	集落址	古墳~平安	堅穴住居址 11棟 掘立柱建物址 4棟 土坑址 3基 焼土址 1基 特殊遺構 1基	土師器、須恵器 石製品	古墳~古代の集落 址の調査		

坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書

	『開斂製鉄遺跡－第1次調査報告書－』	1977
	『開斂製鉄遺跡－第2次調査報告書－』	1978
	『東裏遺跡』	1983
	『中之条遺跡群 宮上遺跡II』(概報)	1993
	『南条遺跡群 塚田遺跡』	1993
第1集	『南条遺跡群 東裏遺跡II・青木下遺跡』	1994
第2集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1994
第3集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1995
第4集	『南条遺跡群 塚田遺跡II』	1995
第5集	『疊鏡堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』	1996
第6集	『中之条遺跡群 寺浦遺跡II』	1996
第7集	『中之条遺跡群 上町遺跡II』	1996
第8集	『上五明条里水田址』	1996
第9集	『町内遺跡発掘調査報告書1995』	1996
第10集	『坂城町試掘調査・立会い調査報告書』	1996
第11集	『町内遺跡発掘調査報告書1996』	1997
第12集	『戌久保遺跡・町横尾遺跡』	1998
第13集	『込山Bほか 発掘調査報告書 1997』	1998
第14集	『町内遺跡発掘調査報告書1998』	1999
第15集	『町内遺跡発掘調査報告書1999』	2000
第16集	『開斂遺跡III』	2000
第17集	『中之条遺跡群 北川原遺跡II』(本書)	2001

発行日 2001年3月30日

編集者 坂城町教育委員会

〒389-0602 長野県埴科郡坂城町大字中之条2468番地

TEL 0268(82)2069

印刷者 信毎書籍印刷株式会社

〒381-0037長野市西和田470

TEL 026(243)2105

